

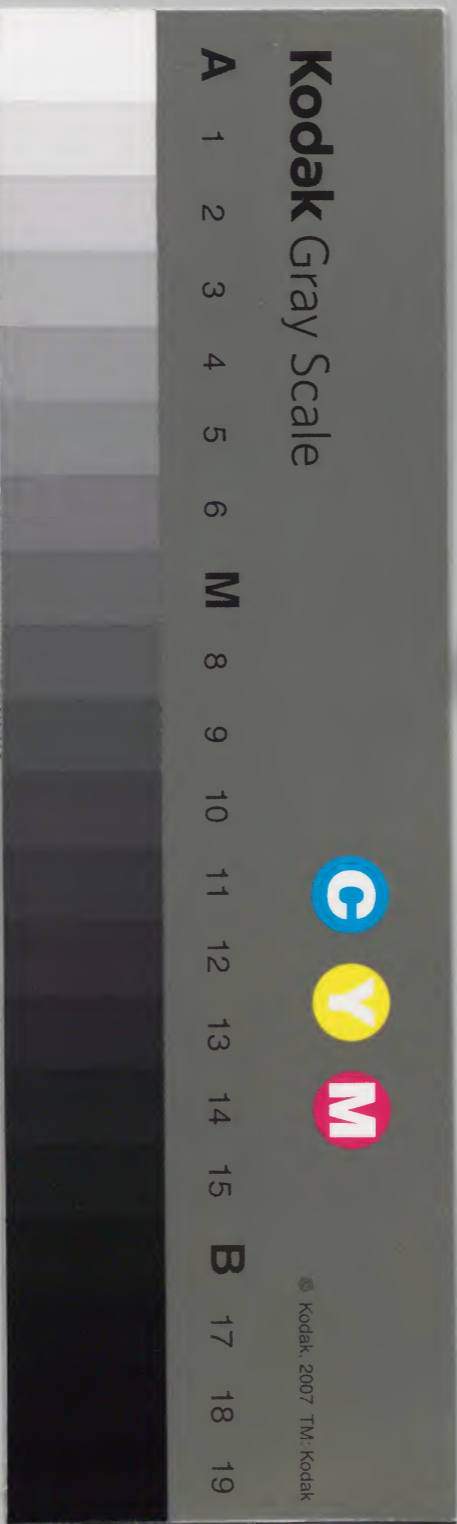
成田名所圖會

內務省圖書  
 第一〇七六號  
 和書部地理類  
 函  
 冊 共五

和書門  
 三六九〇  
 一四九〇  
 二二〇  
 九二  
 冊架函號類

內閣文庫  
 番號 和 36490  
 冊數 5 (1)  
 函號 267 88

267-88



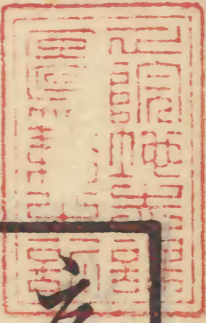
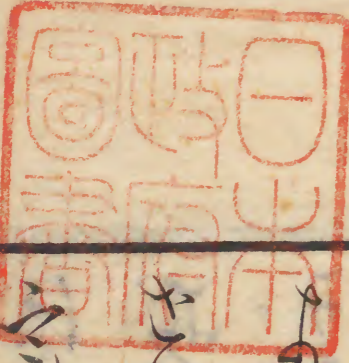
安政戊午春三月刻成

成田參詣記

新勝精舎藏版

序

吾山之靈蹟を之れて、遍尋るるに、  
其跡を仰ぎ、首を傾け、遠く追信  
心の歩を運ひ、是は世より之れを  
潰佛場となり、ぬきと、いふるに、  
一冊に、此上人の法傳あり、記  
す、其出も、あら、其、事、不、平、故、人、中、路  
之、後、の、所、あり、先、た、も、い、立、あ、り、



501-88

にふらふらたさす——てんがらわたりは  
ふれ生い子とて得父の志をばしむるに社  
の進といきまつとも社に居ておこされ出  
か計たふを近とてはてこのうやう乃  
そ子とはなりぬこの言はば世よりは  
らとぬけのありてあるのともあるを  
あふとて無きなるとして古出残  
後とてこの社将門の凶賊すあるに

所のところあり傳一来り——生靈の  
あるのたらしは社一詳ふりは——出  
せむ成のころ名江考より此處まで  
道もくら神一社佛寺の産説を毎  
索りて霞も浮るるなりなく去  
いてきき果ありはまは吾山ハヤるも  
のよりそれは心このたよりにはさ——世  
ある處よと此ふこのたより悦む堪

新編、拙きことわをたて一とよむの輝に  
添ふふる女嘉永七年とり小とて五月

洛西嵯峨御所大覺寺宮御直末

神護新勝寺

傳燈權大僧都法印照嶽



石齋高橋圭書



例言

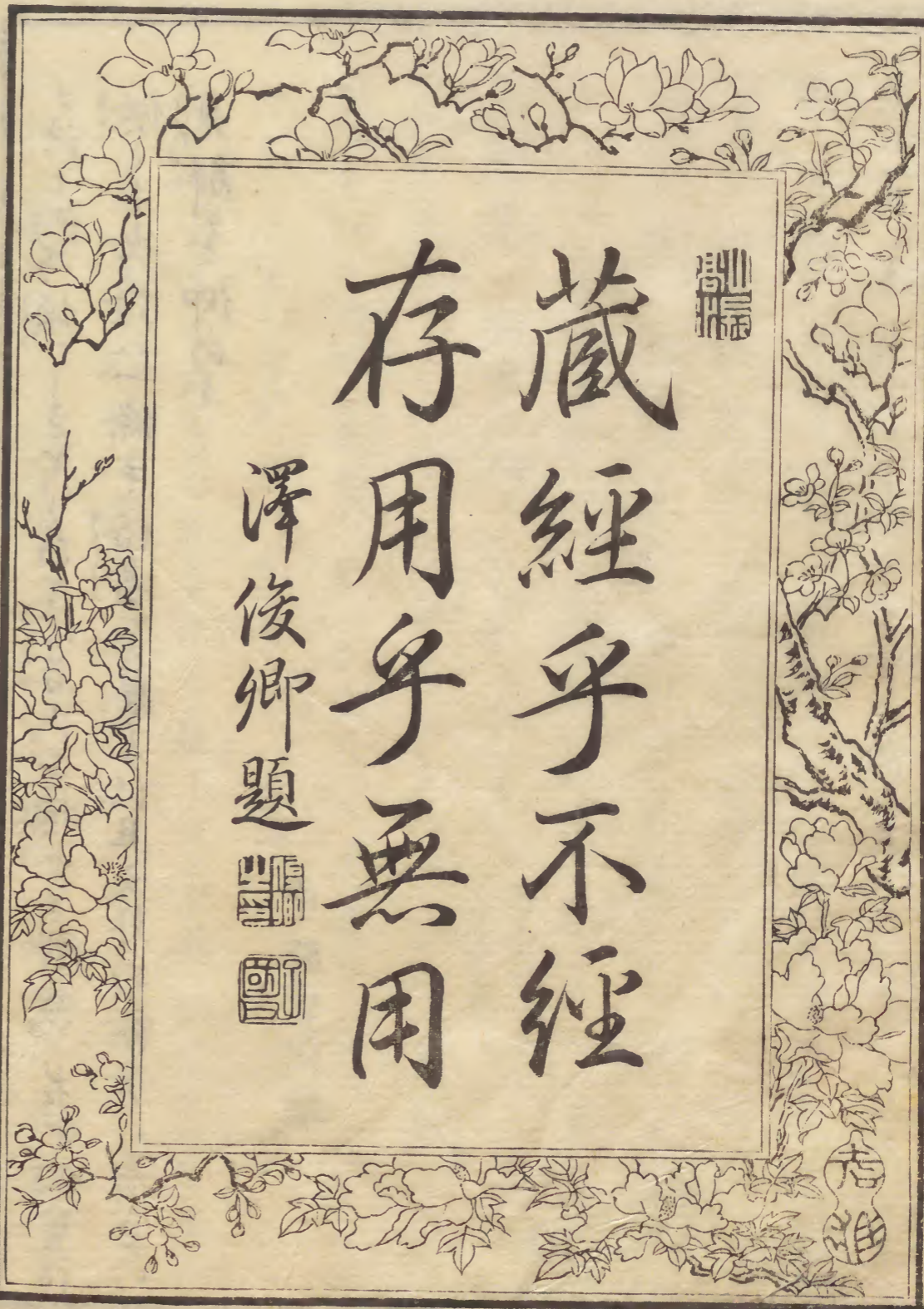
一 此編ハ先人定俊ノ遺稿を増補し成田のて成洩子女記をとりて小  
 江戸より参詣の道中にある古跡及神佛の来由雅俗を論せし路  
 順小随い書きをぬ其取捨ハ親人ハ意ある一  
 一 正行ハ寺社傳る所より引證ハ一字と低書ハその間已と得ざる辨説  
 一 玉石と論を小非テ事實ハ顛倒と正人と欲するのみ  
 一 古器金石を真圖と縮寫し故城残壘ハ其形勢ハ大畧ハ載せて當時世  
 體の一斑を窺い故人ハ往蹟を尋る便とす  
 一 江戸名所畧會ハ載る所の真間國府甚及舟橋等ハこと彼書ハ今のま  
 畧をあくせし此編ハ古ハ故事戰鬪とのせ彼書ハ古來の題詠と載れ  
 ハ此編ハ近代の詩歌と取るさゆる雷同の嫌とほくるのみ覽者怪む  
 ことなきを

一 古文書と多く載るハ當時の事實と暗且其年と追てちりばい行人も  
 歎一々きは之中山舟橋寺世小知られし所ハ其書數多く又散逸  
 可憂も少なを社其要なる物を採り其他ハ目錄の之とあぐ  
 一 引書の孫引ハ本意ならぬと書ふ之けきを止しを得ざる其引と  
 人の名と舉ぐ考證其書大同小異ハ數書と舉ぐして一書ふたふ  
 其繁に過て觀者煩しきとおもひてなり 鄙業ハ△と考へて  
 一 社と伝つくり一寺ことと由來とらへ限りもあけし顯たる所  
 のことを巧く典故ハ先哲既引出たるも尋常ハ名氏と標せし誰  
 そ引へるそのなり社ハあり創見其考ハ片語とて必名氏と舉げつと  
 免て人の美と成長を要元より疑しき事路ハ姑舎先輩の謬誤  
 ひとつめて省き辨駁と好まを傷徳を恐社となり  
 一 此編ハ棠陰翁下總舊事澤田氏植生郡明細記等と多く取れり

此社と例乃煩ハしきとて亦名氏と標セり體裁ハ名所圖會に  
 倣とも考證ハ一條を俗書を舉ぐ且文外の餘意ハ看官の  
 見解を仰の

中路定得識

成田系譜記卷一  
 成田系譜記卷一  
 成田系譜記卷一



藏經乎不經  
存用乎無用

澤

澤俊卿題

澤俊卿印

成田叅詣記卷一目次

小松川村

浮洲淺間社

善照寺

市川駅

國府址

弘法寺

須和田村

六所明神社

養老五年府印  
天平十一年八幡古鏡  
藥師菩薩  
天平宝字四年光明皇后墓板  
千葉國胤所寄古鏡

市川城址  
古戰場  
總寧寺  
什物目錄  
小笠原侯碑  
市川城址  
古戰場  
真間浦  
繼橋  
真間井  
手児奈墓

貞治二年經箱  
國分寺  
釈迦如来  
古瓦  
礎石  
古笈

○日本橋ヨリ市川、四里

逆井渡武蔵葛、飭郡

東小松川村

千住驛

新宿驛

小岩村

市川渡

市川村ヨリ八幡、一里

須和田村以下下総葛、飭郡

八幡驛ヨリ船橋、一里十八丁

行徳驛ヨリ三里、八丁

小網町

中山村

栗原本郷村

船橋驛ヨリ大和、田三九丁

正伯新田以下千、兼郡

前原村

大和田驛ヨリ白井、二里

萱田驛

下市場村以下印、播郡

井野新田

上座村

白井驛ヨリ酒々井、一里廿八丁

角来村

佐倉

本佐倉町

酒々井驛ヨリ寺基、二里八丁

中川村

上岩橋村

伊篠村

成木新田以下埴、生郡

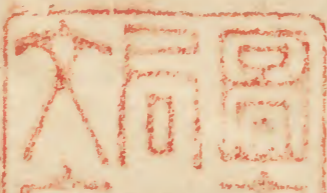
成田村寺基驛

下岩橋村

公津村

船方村

○成田参詣記卷一



成田叅詣記卷一

浮洲浅间社 東小松川村浅间崎と云地あり社領六石慶安元年十月廿四日武藏の国と記

是より前伊 每年五月晦日の神事あり神寶小古鏡二面と蔵見祠官

奈氏の墨付と云 在杉山主膳と称北新氏小滅せられ一寛永二年小再興と云

或云兵部式尾張國驛馬津今ハ松川と里後小云小松川

駒津川相馬郡小配松村あり配松ハ驛馬津なり小見川小見村なり云

別當善照寺小鈴森ハ惜と云社あり驛路鈴小因ある事ならん又湊村

小も善照寺と云寺ありて古鈴と蔵せり原ハ善照寺の退老の寺にて

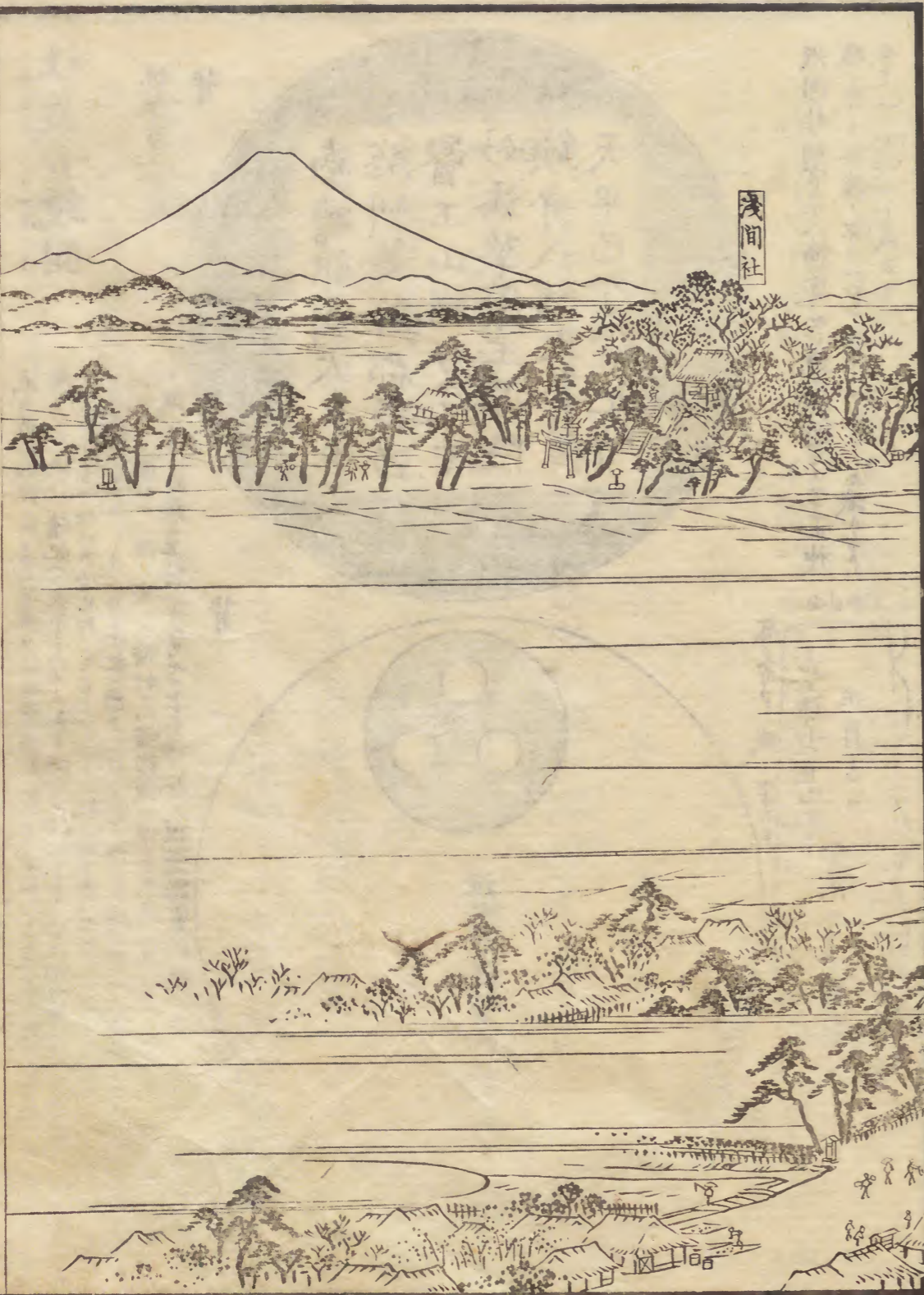
そあやしなま一々故古鈴と傳一と見湊村善照寺古鈴ハ故ありて今ハ北澤ハ森嚴寺にありと云

又延喜式驛馬浮島五足又浮島牛牧とありハ此地ハ事なる小や船堀村

の南と浮洲と云も元ハ此村の内よりありしなると云り昔江府近郊古

見合券四小見ゆ





こまつ川村  
浅間の圖

浅茅集

北とつふる

清代のこのふ

ひきこみよ

小松の川の

てるは

そこのり



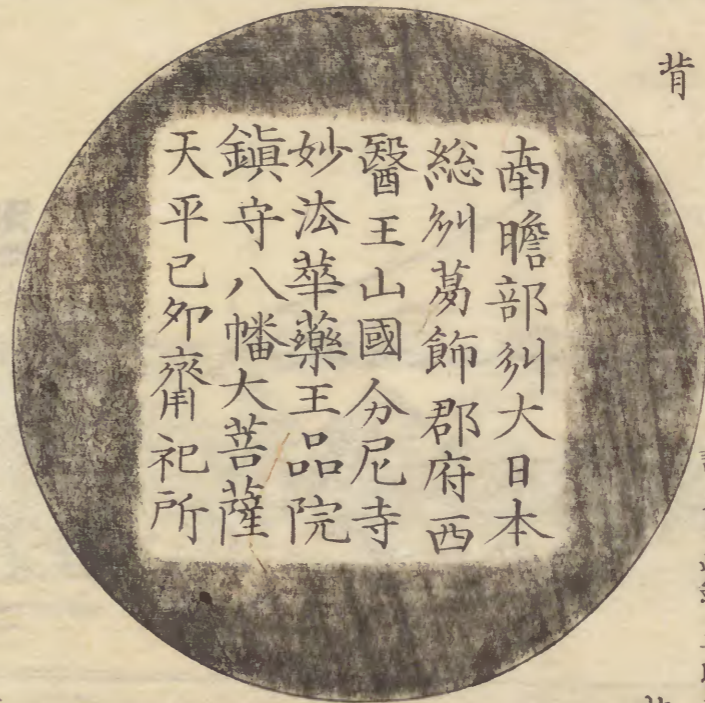
福宮杉山氏

善照寺



社藏古鏡圖

徑七寸厚二分弱



南瞻部列大日本  
 総列葛飾郡府西  
 醫王山國分尼寺  
 妙法華藥王品院  
 鎮守八幡大菩薩  
 天平已卯齋祀所

背

浅間社ノ祠官ニテ八幡ニ寄セシ鏡ヲ偽造モスナホ神職ノ身ニテ菩薩ノ字ヲ八幡ニテモ用ユマシキヲ識ルシハモトノマナルベシト或云リ

一ヤ川

底ノホリミ識 四寸六分

永禄十二己巳年  
 正月吉日 千葉介平國胤

胡粉塗厚 一寸五分許



徑七寸厚一分許 耳オレカ

或云扶桑略記ニ延喜二年五月四日宇佐託宣云名曰大自在王菩薩トアリ是ヨリ卑卑前ニ大菩薩トアル疑ハシ續紀ニ天平十二年ノ条ト勝宝元年ノ条ト皆八幡大神トアリテ菩薩トハナシト云ニワタリハサルナカラ此ハ天平已卯ニモノセシニテハナク後ニ鑄テ寄セシモノナルヘシ天平已卯ハ其祀リシ年ヲケリ上ケ識ルセシモノト見ユ日本紀ノ國々ノ名ナトモ後ノ分國ノ名ニテ當時ノコトヲ記シ古事記ト合ヌナト類ナラン因リ按ニ八幡村ノ八幡鐘識ニ宇多天皇ノ寛平中石清水八幡ヲ移シ祀トシヲ識ルセリ此鏡モ其時ナト寄セシニヤ字跡ノ模様鑑倉以後ノモノトハ見ユサルナリ

○南瞻部州ハ翻譯名義集ニ西域記云南瞻部州舊曰閻浮提洲云々藏鈔

云瞻部此土無相當故不翻唯西域記音中翻為穢樹南瞻部州北廣南狹

三邊量等其相如車云々洲と州小作と云省文より府西ハ此地國府の西小

在とハたり今ハ葛西と称ス府西と云つら書云々云々鑿王山云々

解後小見也鎮守ハ北山抄小鎮守明神位階封戸の事と見え加茂社櫻

會縁起小朝家鎮守皇大明神と見えたりハ幡ハ續紀小天平勝宝元

年十二月丁亥奉ハ幡大神一品と見え見神小佐階と海東諸國記小 孝謙

天皇云々天平勝寶八年丙申有虫蠱ハ幡神祠殿柱為天下太平之字とも

見えたり當時此神と崇敬ありしと推知らハ大菩薩ハ延喜式神名帳

小筑前國那珂郡ハ幡大菩薩宮崎宮大と見ゆ又常陸國鹿島の郡大

洗磯前系師菩薩神社大ともありて神号小も菩薩の字を用られたり

了らふけ礼とも 國分兩寺の建立ありしハ早くよりのこと見え同書  
 小神龜五年十二月己丑金光明經六十四帙六百四十卷頒於諸國國別十  
 卷天平十二年六月甲戌每國法華經十部并建七重塔焉と見え礼そ  
 是より先既小定たることなるべし此鏡の葛と葛分と分に薩と薩小齋  
 と齋と作れる類字體今のもおともれも礼とと或人ハ云り猶よく考  
 べし △此社今鈴森ハ幡と善照寺域中ハあり  
 小祀カ多ク鏡ハ故ありて淺間社ハ稱むと云  
 ○千葉介國胤或邦胤ハ流富々長子たり初新介と稱し後子葉介と襲ひ  
 稱よ天正十三年乙酉五月初日家臣鋏田萬五郎と為小刺礼是歲七月  
 五日竟小創と病んで死去る年二十九大佐倉村勝胤寺に葬る法号傑心  
 常林法阿弥陀佛 一云快樂院殿  
 安瀆淨岸と千葉大系圖關東古戦録佐倉風土記に  
 見えたり  
 ○本土寺過去帳小七日千葉介邦胤鋏田孫五郎狂乱メ御額ヲキリツケ

天正第十三乙酉五月廿九歳逝去

或云鏡儀ノ國胤邦胤ト同人ナス永祿十三年十三歳  
 ニテ父ノ富胤卅九時ナリ未タ家督セズ千葉新介ト云キ

鑿王山藥王院善照寺 同所ハあり

淺間社の東北  
 六丁許ハあり續紀小載る所下徳國

國分尼寺即此寺也

國分寺の條  
 見合ス天平ハ昔一 聖武天皇の勅願

して建立あり毎國一字の靈場なり

同山と全照尼と云  
 銅牌の儀ハ見えたり善  
 照寺ト云ハ此尼寺法号儀

言宗にて京師醍醐三寶院ハ屬ス今ハ此地ハ淺間社の別當と兼勤

新義真  
 按小此寺寺号モ元ノ銅牌モ城内ヨリ出たる

文政十年丁亥七月寺普請小付地中と堀一ハ取出セ

按小皇相金石編小船史王墓版と載たり銅牌長九寸七分  
 潤二寸二分厚五厘と當時墓版の制約畧相似たり

銅牌墓版圖

或云皇太后云大夫人ト云ハ重言ノ上貴賤混合ス大法師ト云厄トアルハ男女分テ捧腹スシト云セトコレカ當時ノ

# 天平應真仁正皇太后正位大夫人光明尊靈

真面目ナレシモシ偽造ナラコホトノ間違心付サルコトハアルマシキ

下總國々分尼寺藥王品院

且那塚銘天平宝字四年六月經王萬部結願供養

別當傳燈大法師全照凡奉

○ハ梵の阿字ナリ大日經疏ハ阿字是一切法教之本凡最初開口之

音皆有阿聲云故為衆聲之母此ハ阿字と冠セるもつることハ續紀  
 正統記等ハ書と参考ハ小太后名ハ安宿姬法号光明子藤原不比等ハ  
 女ナリ母ハ正一位縣犬養橘三千代 聖武帝東宮のをり年十六ハ  
 妃ト神龜元年帝位小即ハ及テ正一位と授ラ大夫トナリ 高野天皇及  
 太子ト生シ天平元年立テ皇后トスル △皇朝金石編小藤氏家牒と引テ母ハ正四位下加茂  
歸天天平元年八月立テ皇后トスル 朝臣比賣初縣犬養宿祢東人小嫁ハ故ありテ大  
時年二十九とあるハ異なる傳ハあり 東大寺及天下國分寺ハ 聖武帝の建立ハ此  
と皆太后の勸ムる所ナリ 高野天皇受禪寶字二年小尊号ト上リ天  
平應真仁正皇太后と稱シ天平宝字四年六月薨年六十六 聖武帝繼位ハのをり  
是月癸卯大和國添上郡佐保山小葬ス 光明ハ金光明最勝王經ヨリ取  
祀ル号トスル一ハ無小元亨釋書光明子の傳ハ體貌姝麗以有光耀故名ト為  
とハ附會ノのトナラむ且那ハ檀那ハ此省文アリ翻譯名義集ニ檀那ハ秦言布  
施若内有信心外有福田有財物三事和合心生捨法能破慳貪是為檀

光明皇后  
千人と浴する  
る  
圖



大日本史天平初僧  
玄昉自唐還帝賜  
紫袈裟以為僧正  
安置內道場后甚  
寵異頗有醜声云  
當時のこと想ひ  
やられたり

小中村清矩云續紀世世八光明  
皇后正一位を授らるる事  
左記と誤るも其證同書十五  
小神龜四年七月賜後三位藤原  
夫人食封一千戸と云同世天平  
元年八月詔立正三位藤原夫人  
為皇后と有り皇后小立玉  
時正三位と皇太后小立玉  
と正三位を授る事聖武帝即位  
の事正一位と授らるる事誤  
りたること明け天平字に誤  
至り正一位の進を誤るる事

○成田泰諸記卷一

○十

七  
七  
七  
七  
七  
七  
七  
七

那云此且那ハ光明皇后と指さるる」塚ハ桑滄の夏少平平地となり小や  
又ハ塚とり六名のこ山て元より平地小也」銘ハ韻あるものと云是ハ誌と  
識とあり之ハ後昔より金石に識せしものハ概小銘と心得しと見え  
て「識せし」徑王ハ法華經の事なり一部ハ其第廿三藥王菩薩奉  
事品ハ此經諸經中王の語あり是より出らむ下総國國分尼寺ハ類  
聚三代格小天平十三年二月十四日 續紀十三年 三月條同の勅小每國僧寺施封五  
十戸水田十町尼寺水田十町僧寺必令有二十僧其寺名為金光明四天  
王護國之寺尼寺一十尼其寺為法華滅罪之寺兩寺相去宜受教戒  
云 皇朝金石編小膝室感神聖武天皇銅版 續紀小天平十六年六月甲申詔曰  
詔書と引并寫法蓮華經十部ハ又ハ  
畿内七道諸國國別割取正稅四萬束入僧尼兩寺各二萬束毎年出舉  
以其息利支永造寺用とあり然る小延喜式ハ國分寺料五萬束とある  
ハ天平のをりより又ハ一層の冗費を加へし見ゆ 藥王品院ハ前小

あけたる藥王菩薩奉事品小女人成佛文あり此品とり院号と  
せしふん 別當ハ一寺ハ統領とて寺職なり下文傳燈大法師ハ僧官不  
り分別して觀之冠位通考小續紀と引天平寶字四年七月庚戌  
大僧都良弁等ハ清小ハ四位十三階ハ制と定らる傳燈修行誦持と  
三色小分ハ社各法師位滿位住位ハ四位あり別ハ大法師位あり  
て以上十三階より大法師位ハ四位の移位とて法師位大法師位ハ勅授  
滿位住位ハ位ハ奏授ハ社ハ當時大法師位ハ尊ととるハ此尼ハ  
位記ハ此制ハ立一月前なり 全照尼の考得ハ 古鏡の条と  
と攝瓦 此条ハ或記

國府址 國府基村にあり 今總寧寺領百石の地と國府基村と稱され元ハ市川村と  
今國府基と稱する地是なり 豆相記ハ險岸高岸下帶大河と  
○江戸名所圖會小國府葛西地小あり永正六年宗長記行東土產に

隅田川に舟して葛西の府内を半日けり葭ありとあり今井と  
云津ら浄土門に寺浄興寺に立りてとあり證とありと云  
是六庄を府  
なり

○葛飾浦名勝志小葛西伐下總國府と云々然とも東鑑を考るに  
頼朝卿下總に國府小九月十九日より十月二日まで御陣を居ら此夫  
了太井隅田の西川をさるとあり國府ハ利根川より東の方なり  
又同書小治承四年九月十七日不待廣常參入今向<sub>レ</sub>下總國給千葉介  
常胤相具子息六人參會于下總國府云々廿八日遣御使被召江戶太  
郎重長廿九日昨日雖被遣御書不參間被遣中四郎惟重於葛西  
三郎清重之許十月二日濟太井利隅田兩河精兵及三萬餘騎云々  
(東鑑一條八畧文なり名  
勝志小治承四年九月十七日)

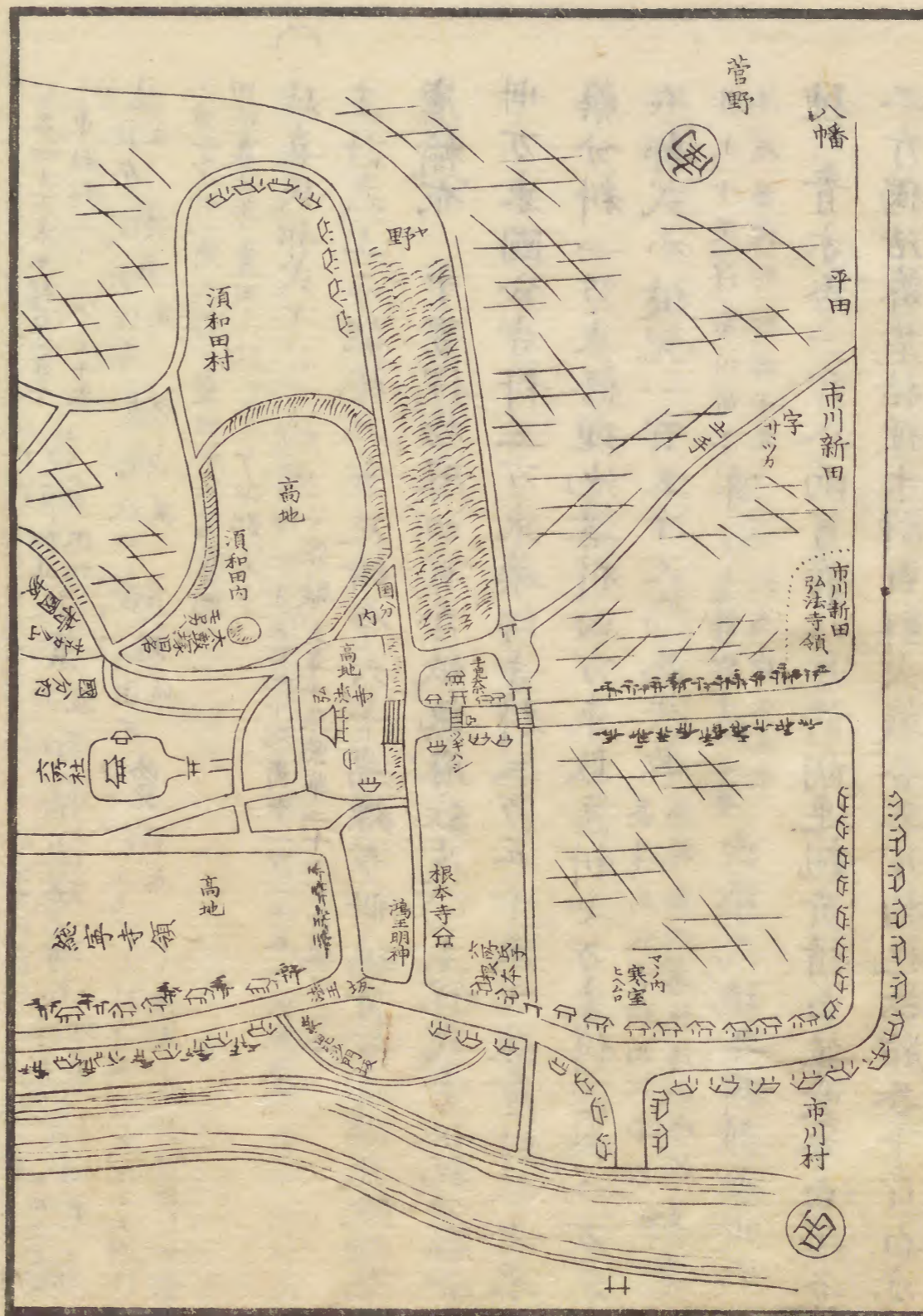
○和名類聚抄卷五國郡部下總國國府在葛飾郡行程上三十日下十五日管十一田二万六千四百三十二町六段二百三十四歩正

公各四十万束本稻百二万七千束雜稻二十二万七千束  
葛飾カトシカ加止知千葉チヤ波ハ印幡インハ匝サフ瑳サ海上カミ加美カミ香取カトリ里リ加止カ埴ハ  
生波フ牟マ相馬サウマ佐サ宇ウ獲ウ嶋マ佐サ之ノ結城ユヅキ由ユ不フ豐田トヨタ止ト与ヨ  
三万二千廿八町小作豐田郡の下舊岡田延喜廿年豐田小改む又千田郡あり

○延喜民部式下に下總國布一千五百九十端商布一万一千五十改鹿革廿張皺文章十張紫草二十六百斤櫛子四合

庸輸布 中男作物麻四百斤紙熟麻紅花○主稅式上小正稅公麻各  
卅万束國分寺料五万束藥師寺料三万五千束文殊會料二千束  
藥分料一万束修理池溝料四万束救急料七万束俘囚料二万束  
兵部式小健兒一百五十人○馬牛牧高津馬牧大結馬牧本島馬牧長洲馬牧淨島牛牧驛馬  
井上十足浮島川曲各傳馬葛飾郡十足千葉相馬郡各五足典藥式進年料雜藥卅六  
種 青木香一斤八兩芎藭八斤前胡連翹黃精白芷藁本白薇各  
二斤獨活薺芫桔梗木斛白鮮大戟各五斤枸杞松脂各十斤白朮

眞間國府臺  
略圖  
當時國府ノ形勢  
ヲ觀ルカ爲ニ今日  
擊スル所ヲ出ス





大學寮  
釋奠圖

釋菜孔子顏  
子ノミテ祭ルト云  
弘安中釈奠供  
物圖ハ丹鶴叢  
書ニ見ユ

學生仕



江次第五卷仁平三年八月台記先聖先師九哲像  
巨勢金岡所寫也延久四年三月十四日甲午權大納言  
源隆俊卿着伏坐被榮大學寮先聖先師九哲等像  
可被修補日時勘文四月三日壬子時也件像元慶四年  
巨勢金岡以唐本所函繪也云々  
又或説曰吉備大臣入唐持弘文館之畫像來朝安  
置大宰府學書院大臣又命百濟画師奉圖故本  
置大學寮云々

兵士



兵士



執事執能  
執事執尊



大祝  
贊引



南門  
館官

學官



其二  
 新葉集  
 妙光寺内大臣  
 くら人のむりの  
 かををうりきて  
 佐多たのむく松の  
 板あつき

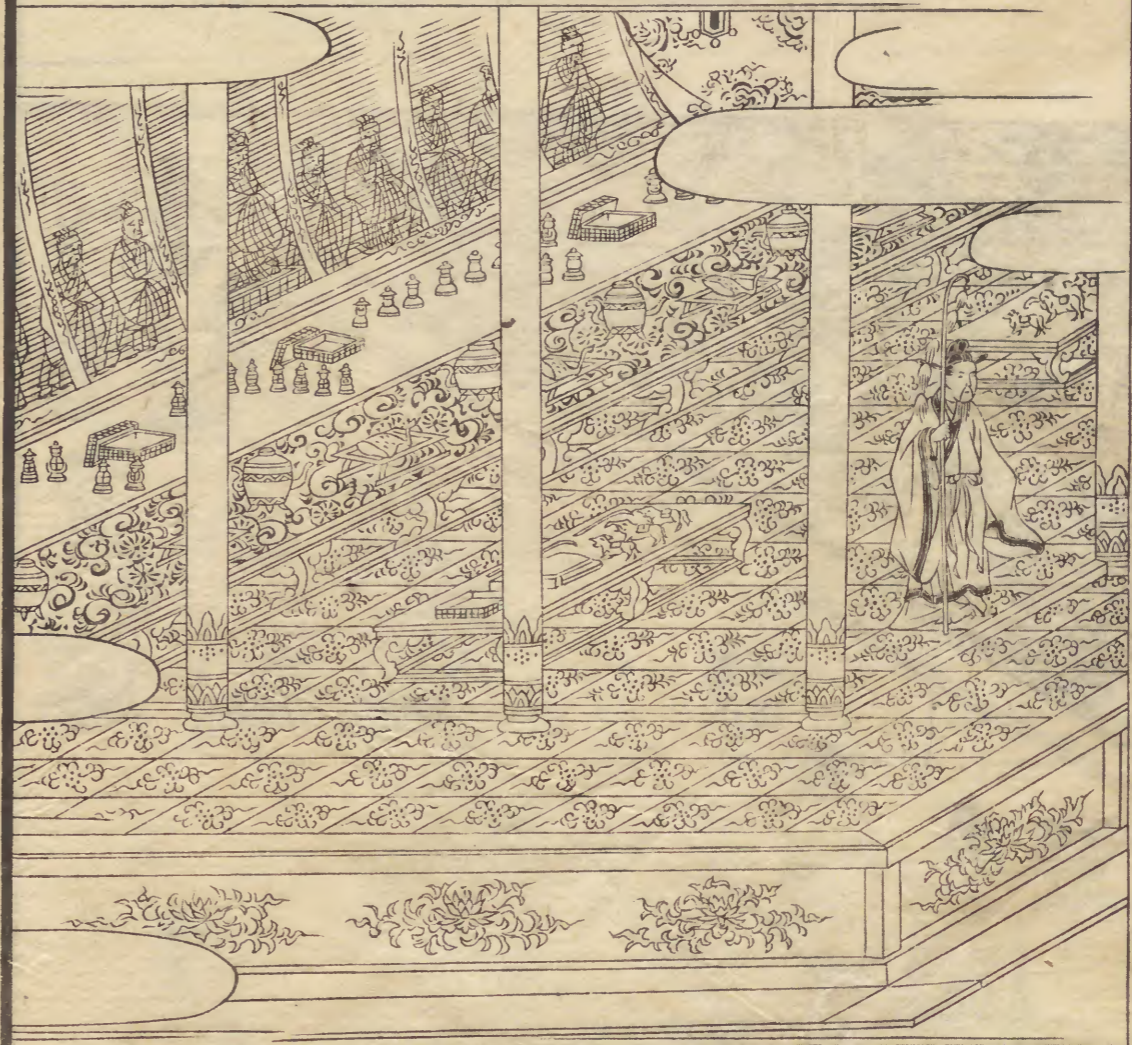
○成田参詣記卷一



其三

協律郎

冉有 季路  
仲弓 宰我  
伯牛 子貢  
閔子 子游  
先師 子夏  
先聖



管家文章

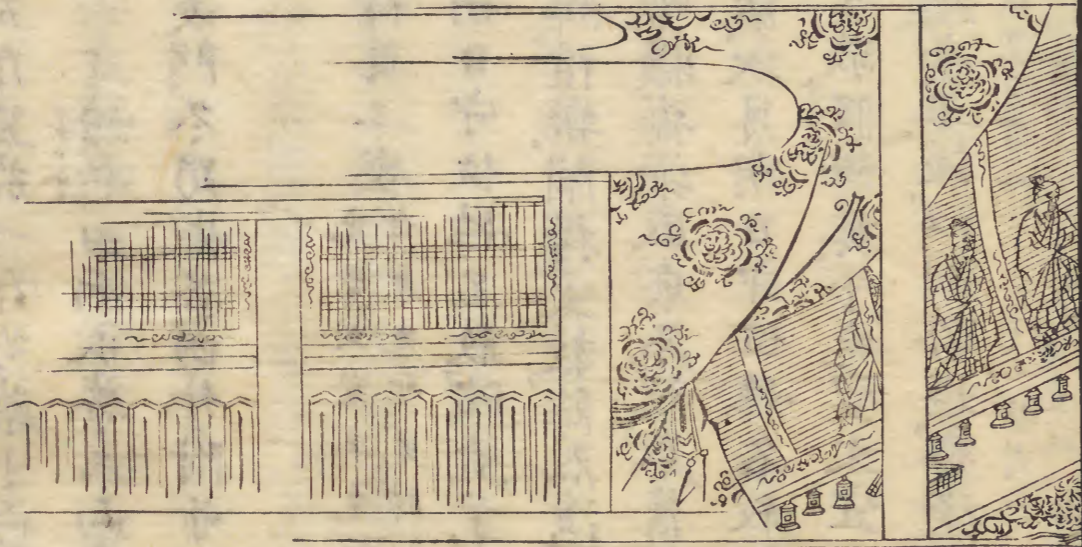
讚岐聖廟秋莫有感

一趨一拝意如泥

罇俎蕭疎礼用迷

曉雨春風三献後

若非供祀定兒啼



菅家文章  
讚岐聖廟秋莫有感



三斤五兩藍漆五斤茱萸一斤芍藥十兩瞿麥六斤地榆十四兩白頭公九斤伏苓六斤續斷四兩瓜蒂三兩補黃二斤梔子大一斗薯蕷桃仁各一斗麥門冬蜀椒各四升附子大五升荏子二升地膚子一升獺肝二具

○同雜式小諸國釋奠二座 先聖文宣王先師顏子但太宰府者先聖先師閔子騫三座 祝文

維某年歲次月朔日守位姓名敢昭告于先聖文宣王維王固天攸縱誕降生知經緯禮樂闡揚文教餘烈遺風千載是仰俾茲末學依仁遊藝謹以制幣犧齋染盛庶品祇奉舊章式陳明薦以先師顏子配尚饗維某年歲次月朔日守位姓名敢昭告于先師顏子爰以仲春仲秋率遵故實敬修釋奠于先聖文宣王惟子庶幾體二徳冠四科服道聖門實臻壺奧謹以制幣犧齋染盛庶品式陳明獻從祀配神尚饗 古ハ國々釈奠の禮あり一と云雜式ふく見えたり今ハ跡方もなく其方りるを以て知れ人なりを以て小引替堂塔ハ依然として現存ハ世傳と云なうら

欽つらーきとらなや釈奠のことハ大嘗寮式西宮記北山抄江家流第ホマ西

○三代實録曰貞觀二年十二月八日新修釋奠式頒下七道諸國或書小云管家文草小仁和二年正月十六日任讚岐守ら祀一とさ州廟釋奠有感の詩あり一趨一拜意如泥躡俎蕭疎禮用迷曉漏春風三獻後若非供祀定兒啼又慕京集に二月の釈菜金澤文庫少く行ふり一三好日向守勝元の許りりやこはまを社を隣家梅花といふ題を聖供よとくつこい侍るとてこふ社やうく友垣の近きふろ遠きそなをう梅の下風と見えたるはる此頃静ならざりし世中よくたもく釈菜行ハ社一行事といえつら一くふんある新葉和歌集に妙光寺内大臣の年中行事三百六十首の中に釈奠とよめる歌。うら人のむらり社をうらきて仰げハ高き秋のよれ月。年中行事歌合小二位中将四辻善成卿 能釋奠儀よ免る。唐びとのうらこ

さうげをうろくと免ひしを時とくふまつること見えたり

○後花園院康正元年乙亥八月十四日丁亥行秋奠

寛永十年癸酉二月十日始釋菜于忍岡孔廟 幕府秋菜之典肪

於此。舊儀称秋菜寛政丙辰改称秋奠昌平志云釋典舊儀据明

制云々今儀寛政庚申所定雖專倣唐禮而廟殿仍用明制云々要之均是

一代制作也所謂舊儀亦止謂寛政庚申以前已如寛文元祿諸儀

則舊之又舊者○今儀專用延喜式然自謚号配享以至祝文薦品

其從時宜且仍舊貫者尚多今儀者寛政庚申二月始行之禮而未

更審定者也○學校及秋奠之因年詳見于昌平志

○大學寮唐の國子監小准して帝都の御學問所へ遠近の諸生あに集

了食物薪等、朝廷より賜ふ寮に内小東西の二曹阿東曹ハ

管丞相の御流義なり西曹ハ大江維時の流義之職原鈔曰大學寮ハ

四道儒士出身の處之和漢最重職たり紀傳明經明法算道ら社と四道

とりふ又當寮にハ先聖先師九哲と安置し春秋二仲小秋奠又東西の

二曹ハ管江に二家其曹またり諸氏出身の儒道を此二家小訪ふ

寮の頭ハ儒中の極之當寮に長官大學頭らと以ふ唐名唐名唐名國子監助子司業允國子丞

博士一人唐名唐名國子監助子司業允國子丞二人直講二人音博士二人書博士二人明法博士二人

律學博士二人學士二人學生四百文章生三十人得業生十人管生三十人云々

延喜式曰大學寮に博士に夏冬時服と給ふと云々むりハ國毎に學

問所ある博士醫師各一人其學生大國ハ五十人上國ハ四十人中國ハ三十人

下國ハ二十人々之醫生ハ五分の四と減了大國ハ十人上國ハ八人中國ハ六人下國ハ四人と或書に見ゆ

○制度通卷十本朝之制每歲春秋二仲上丁日秋奠于大學寮祭先聖

先師從祀九哲釋奠のこと 文武天皇大寶元年二月丁巳の日ハ一の

て行ふ是らを以來御代々修一行らる文明の比まてこれありと

云へり 續日本紀 光仁天皇寶龜六年冬十月右大臣吉備公薨云々  
 先是大學釈奠其儀未備大臣依稽禮典器物始修禮容可觀ト云々  
 小中村清矩云此六 孝儀帝ノ頃と括て云々一 茲とて或書小室龜三年の頃と  
 云々ハ誤リ吉備公室龜元年小大將を罷らる二年致仕さまじき事云々  
 釈奠ノ式ハ享ノ日未明五刻ニ郊社令ソノ属及廟司ヲ率テ先聖ノ神座

本朝釋奠先聖先師九哲圖

丹有	高野天皇
仲弓	神護景雲
冉伯牛	元年吉青
閔子騫	大學助
先師顏子	教膳大
	丘上疏言
先聖文宣王	夫子勅号
	夫子称
季路	文宣王
宰我	
子貢	
子游	
子夏	

神并ニ春日祭ノ前ニアタリ又ハ某日ニ當レハ三牲並ニ兔ヲヤメラレテ

ヲ廟堂ノ内ニ中楹ノ間ニ設ク先師顏子ヲ首座トシ  
 閔子騫以下冉有マテヲ併テ四座文宣王ノ東ニ設  
 テ西ヲ上座トス又季路已下子夏マデノ五座ヲ文  
 宣王ノ西ニ設テ東ヲ上座トス合テ十一座何レモ南ニ  
 向フ其牲ハ三牲并ニ兔アリ 三牲 大鹿、小鹿、豕、各五  
 加五臟菟醢料  
 漢土ニテ三牲ト云ハ牛羊豕ナリ  
 皇國ニテハ右ノ通りニ替用ヒラル又ニ仲ノ丁日園韓

五寸以上ノ鯉鮒五十隻ヲ用ヒラル三牲並ニ魚イツレモ六衛府ヨリコレヲ進ム  
 又ソノ日國忌祈年祭日食ノ變ニアタレハ次ノ丁日ヲ用ユ諒闇ノトシニハ遺詔  
 吉服ニ從フノ類モ享ヲ停ラルナリ

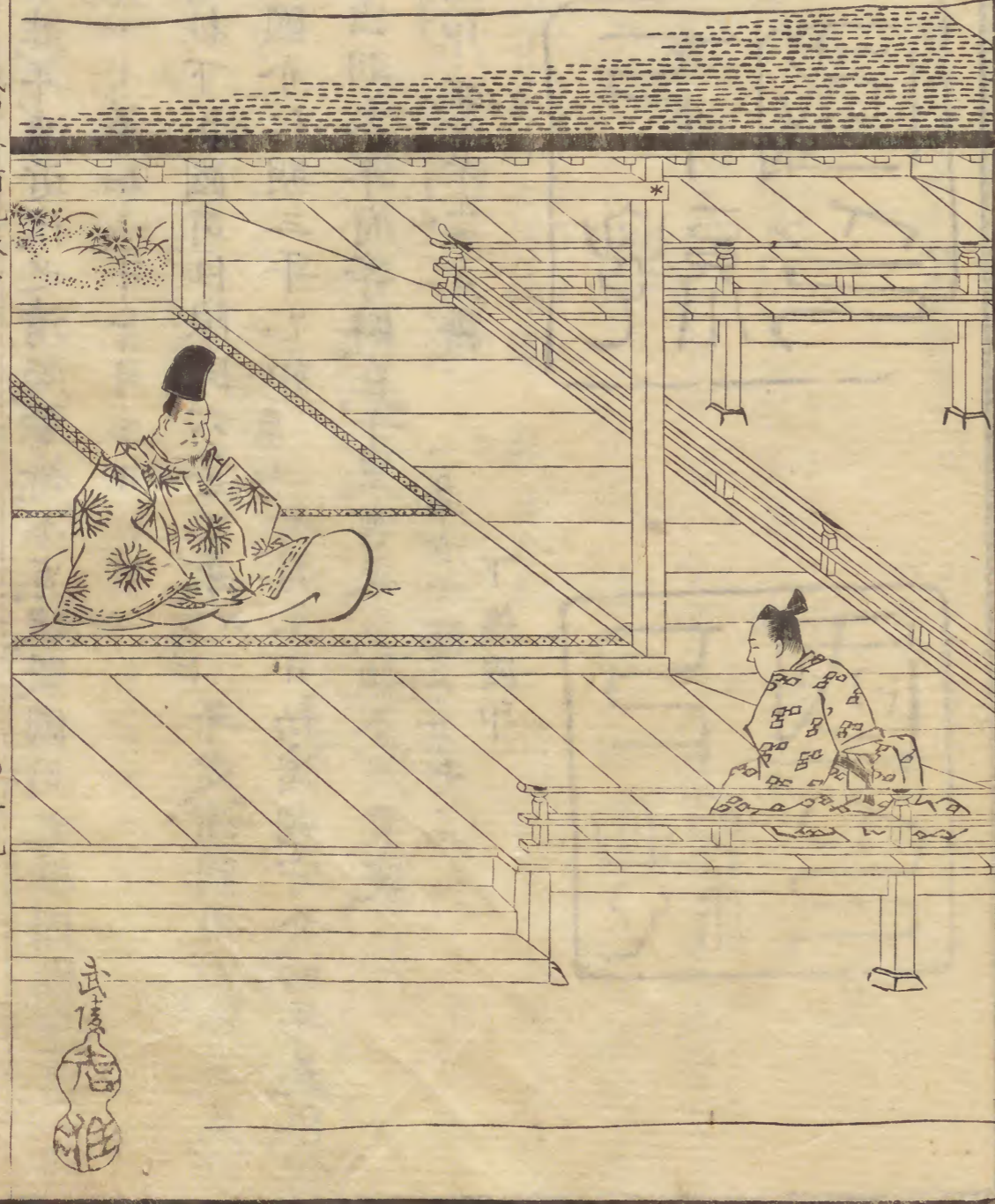
○續日本紀小大寶三年七月甲午正五位上上毛野朝臣思足為下  
 總守大寶三年より和銅元年小いたり在任六年ふり此本州任守首ふり是より  
 先小も國司のと見ゆれ伊清守紀遠藤摩國司臨時の宰官之後未守介掾目ともに通し  
 國司と  
 稱以

○類聚三代格五十三左 小太政官謹奏諸國守介四年為歷事

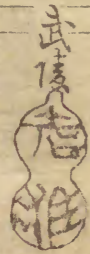
右謹檢選叙令初位以上長上官遷代皆以六考為限慶雲三年二  
 月十六日改定四年大同二年十月十九日更據令文弘仁六年七  
 月十七日復慶雲格天長元年八月二十日令介以上別處六年之  
 秩夫吏者民之所歸民者吏之所本頃年良吏之風希聞窮民之憂  
 不息臣等以為善人三年尚可勝殘四凶九載難復致功然則治之

廳官 國司 小調 畠

○成田叅詣記卷一



○十九



千載集雜下 旋頭歌

下徳のこゝろまのりなるを任そく  
のほもこりたるこゝろ海の後頼のね長  
まつりそく

源仲正

あつちのやへのうまをせわさそくも  
そくあはのりなるを任そく

返一 源俊賴朝臣

こゝろたをせわさそくも  
そくあはのりなるを任そく  
そくあはのりなるを任そく

能否非年遠近代之清濁賢將不肖伏望國司之歷因循慶雲一用  
四年云々 兼和二年七月三日

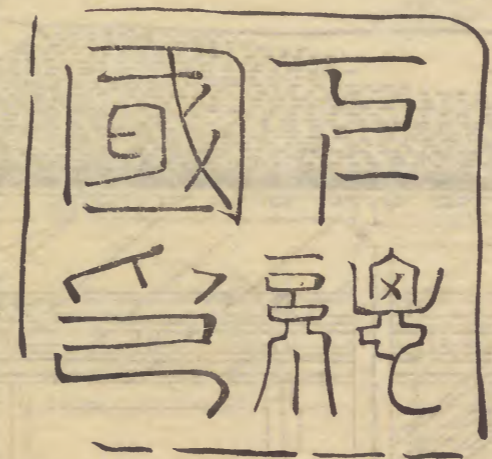
○濫觴抄下小國司任限同六年乙未 弘仁 年定諸國司以四年為任

限諸國介仁明三年乙卯 兼和 七月三日勅諸國守介四年為限但

陸奥出羽太宰府等僻在千里書來多煩不可更定

下總國印 養老五年戶籍

集古十種 印章部二 下總國印



石見京師穗井田忠友埋麿發香一 印部 天平勝宝三年五月廿一日 下總國司解所印

市川故城址 國府臺村 總寧寺乃城是

○鎌倉大草紙小卷 上杉憲忠より今度中務入道一心の子息實胤自

胤二人を取立下總國市川小楯籠子康正二年正月南園書梁

田出羽守其外大勢指遣一數度合戦一々同十九日終小城と攻む

梁田河内守八關宿つら打て出武州足立郡と過半押領し市川の城と

ころ云々 市川城又國府臺城と稱せしを江戸名所圖會に市川城址と今知る

承四年九月十一日武藏と下総境に於て市川河内守と市川守と云ふ所著たもふとあり。市川國  
府に於て地名と見えく常陸府中の傍に市川と云ふ所見たり。其外小楯籠子

○東鑑 卷一 治承四年九月十七日丙寅不待廣常參入令向下總國給

千葉介常胤相真子息太郎胤正次郎師常 号相 三郎胤成 武四郎



依古圖

板橋貫雅筆

都官

○成田參詣記卷一

〇二十一



源のう右たい大将  
 下の總の國の府  
 小の到るの  
 圖



胤信大須賀五郎胤道分國六郎大夫胤頼東嫡孫小太郎成胤等參會于下總國府從軍及三百餘騎也常胤先召覽囚人千田判官代親政次獻馱餉武衛令招常胤於座右給須以司馬為父之由被仰云常胤相伴一弱冠進御前云以之可被用今日御贈物云是陸奥六郎義隆男號毛利冠者頼隆也著紺村濃直垂加小具足跪常胤之傍見其氣色給尤可謂源氏之胤子仍感之忽請常胤之座上給父義隆者去平治元年十二月於天台山龍華越奉為故左典厩弁弁于時頼隆產生之後僅五十餘日也而被處件縁坐永曆元年二月仰常胤配下總國云

十月二日辛巳武衛相乘于常胤廣常等之舟棹濟太井隅田西河精兵及三萬餘騎赴武蔵國云今日武衛御乳母故八田武者宗綱息女小山下野大徳政光妻号寒川尼相具鐘愛末子參向隅田宿云

○相州兵乱記卷三小弓義明合戦ノ條小弓の所所義明の威勢廣大小成一の本より倭人より關東と退治して總領家と指越關東は長者とあり下と企く玉不由さそ急げれ古河殿より氏綱と内々御頼あり小弓殿對治あり一氏綱も義明の威勢強けき吾々為すもあはれりかんと無て思はれし則御請と被申分國の勢と合と小弓の意向あり處小州諸家傾け申けり義明と申近代多双名大將まで方御跡をも継玉ふ一人なきは清退治のりありん只和平にふされ末々御所小弓と立鎌倉より先被申候と説けしとも氏綱終小用給一に打立と聞えけれ義明聞台て急々中途小馳向て防けり清舎弟基頼と御息小弓御曹司と先驅に大將とて里見義和と副將軍小宮め房州西總州に軍兵と催一同國鶴の臺小陣と張て市川と前とあり待掛たり此國府臺の城と申中畧近國每双の城郭去る文明十一年七月

十五日上杉氏家臣太田道灌の白井の城と責めし初て城小とり置け  
るなりと茂時も清馬と被出敵あしと待あふ去程小氏綱は天文六年十  
月四日小田原と打立江戸の城より着到と付玉ハ方より大勢馳加  
りて二系餘騎と記し去程小明日五日の朝合戦と定りしハ  
先陣ハ宵より河の端小舟のひより明なる松戸と越んと堤の下にそ  
ひろける夜巴小舟けれハ小田原勢川端小舟望む一陣ハ箱根殿を初め  
とて松田志水狩野笠原二陣ハ遠山山中多自荒川金石齋以下の兵雲霞  
の如く押寄る小舟勢先陣権津村上堀江唐嶋以下川端よりいへて  
待懸たりと物見の兵と御旗布ハ参りて申けるハ敵已に川段越  
候其勢雲霞の如く二三系と見え候味方ハ御勢少て常々めくりに對ゆる  
の清合我叶ふと云ふ小舟と以て大と打こ難叶只今急に御旗を働  
川中ハ勝負と決まると味方引やう小もてハ敵の先陣半越さんとき

急ふと川へ押し免候り必御味方の勝を乞ふと委細申上つ  
るハおれも諸軍此候可然と云處小義明とてハ大ハ笑ひ互ひ合  
戦の習より一足引虎も松つと小成一足もそがハ嵐を虎とふるく  
云へり引まねんハ敵小利とてくる端を乞ふ其上勢は多少小依る  
うら兵は剛腹より乞ふ氏綱ハ武勇我片手も及ばず何程の事  
あふと川と渡らせ近くと引寄吾手に懸て氏綱と付取て後小東國と  
安と治むハ一歳月ハ本生愛にあり氏綱とあふと乞ふと扇と打掃  
りて運ば盡ぬる浅間谷とたてていん方もなり小田原の先陣ハ度小  
颯と馬を打入て弓の本拜末拜取違て匹馬小流をせきよて向は岸あ懸  
上る推津牟人佐鹿嶋の郡司以下散るに互合命と惜まは乱合て切つ突川  
火と散る戦ひも懸立られ引退く處小里見義和逸見山城以下  
強弓勢兵はめき叫と射立けれとも小田原勢事ともせは進ま計は西方

より射る矢小先陣數百人痛手負て進垂たり是と見て先手は大将少弓の  
清曹司と流所は清弟基頼のつくり切りり五ふ氏綱御覽とて爰に  
深入りし先手の大将は旗とみるそ入立て討取れや者ともと下知され  
ハ伊東朝倉赤原石巻の二人當千の兵とも両方より取きて散るに責を  
終の大將は馬の平頭二太刀切らる大居小伏ハ下立て戦い腹の下内胃  
吹返せ巡れ二ヶ所突き氣盡力たゆと終討死したまひる逸日之は  
明は清前小参りて申さるハ今朝は軍小清味方軍兵其數付死しりぬ  
其上先手の大将清馬とて不見候とて清通も亦清討死しりぬ  
何様味方負軍を多く爰と落て重て兵と催し今日に恥と清め  
んと云け終は義明先より強勢は程と油等小知らせんとも先  
ちて打て出つ其日は裝束と赤地の錦はひたれ小相のすそふ物  
と打つるよりあやたれこれ鑑きて兼國行三尺二寸の面影と云太刀二尺

七寸赤銅作の重代の清太刀二振より法城寺の大長刀とて短小  
取り鬼月毛と云名馬小清紋は梨地の鞍置て紅は太とて白あまの  
ませ唯三つ小進てつけ馬は佐木少府二郎以下馬廻二十四騎と  
そつてつけ出たり義明の清馬ハ奥州の葛西殿より六郡一の名馬  
とて去年進らせられたりけり三戸たち早馬の馬は逸物なれ  
まは本よりとてやうは乗手にて人よりたん計先立て敵軍馳入  
あぶそのとて人さつとと幸と踏たや切り落は是を大将と見てけれ  
前後より取籠吾討とんと責け終てそ本より馬強ふる打物の速者  
たり社ハ自武勇は人小勝終たると憑て軍を大早りして逃る敵と退立  
と切て落し味方は兵もつとけり小太勢は中少入る小田原勢は  
中少安藤と云者荒は思き鐘ふりたりとてその甲に鉄形うつて  
そりたりと大長刀と抜てさめは義明と目より事近くとよりける

とゆきよあきら  
小弓義明  
戦死の圖



○成田泰諸記卷一

〇二五



探察武筆

處を義明御覽して弓手の方へありきて開き少く打甲の志こ  
ろのくけりとりけり首と丁と打落し餘る太刀少く左小五郎敵を拂ふ  
其刃小骨を冷し敵救て不近きけり岡小打寄て續く法方を待  
玉ひ鐘少あま血と笠符にけり押拭ひ息を休めて居たりける  
以下兵とも大將の行衛を不知氏綱に旗本と懸合けり五十騎小  
打ふさ社左の山さく之をちかひ小落行けり猶取りて義明を助んとす  
兵も少なりこいつれ見る處小山田原中にも八州喜双の強弓と聞た  
る横井神助と云者其比三浦の城代ありけり初めり房州勢と相戦  
ひ手は者多く討た不安思ひて義明と目小けあひませ寄ける先度  
の合戦小先々兵多明小懸立ち社魚鱗も不進窮翼も不圍し  
辟易し見えける時ゆき此敵を唯討とんとせハ討もらうとんと  
討て落さんとて馬より飛下て笠符とく一畔を傳ひ藪とこたたり

近付寄て三人張十三束志計小引去るは三浦の守後代横井神助と申  
者候受て御覽せしと云も丁と射る義明のせんたんの板と  
うけて射通し矢先三寸あり射貫けりもの猛將を社とも一筋  
少て目く社太刀と杖あつさ立まきし死玉ふ横井うつをたて  
矢さけひ敵の大將とハ討留たりと叫ばる處小御所の御馬廻り三騎  
馳來り神助と付とんと切て神助も同心小林平左衛門と云者馳來り  
馬より飛下り向敵一騎討て落し二人と追散る間に神助馬よりうり  
打つ終てこそ切合る其間小松田弥二郎直違馬と馳懸て一太刀打て  
當倒し義明の首とバ取てけりもの大將なまとも運盡果てやと付  
社も佐々木四郎遠見ハ佐野藤三野以下御馬廻深へし戦けり  
大將社御討死と聞て今ハ雅社を為少く軍とをく各々馬と乗放し大  
將社死骸を枕とし自害する外の事ありと各々馳行處小遠見山城へ

道右おひぢさし終るるにけり小五矢少くありけり馳來て申ける皆て自害し  
まふ處武士に布置あり終れとも少く小錢一置一君達と云惟久隠し申  
ぶき定てやうと生捕申て名將の御一跡と匹夫のひつりあかけん事口惜  
うぶ一歎さてもあまなり此度の命と金一君達と云一申謀と云し時  
節と見合せ先君の恨と死後小報一玉つ君も終り思多しと理と  
盡し申けり此人一一同ふ申るる口惜ことを宣ふ物うふ愛とのけり  
二度惟久面と合ふべき唯自害せん行處山城をて申るる是は各々  
のあやまりなり死と一途不定るる近ゆく安一徳と万代小錢をば遠く  
して終りて云へり唯もくと進め終りて此人相伴ひ小弓一飯り若君  
と御供申御寶物とり御殿小火とるる房州へこそ居りけり山城を  
從二騎義明御死骸の邊より馬を飛下り扇と上げ是は此日比鬼神の  
やうに申つる鎮東の將軍源義明と聞えし玉ひし御内の侍遠見山城守

と云者也小田原方小我と思はん者あらは押寄て首をとれと扇を擧て招き  
け終り小田原終人山中修理亮と名乗て近くと寄け終り山城馳寄て御供  
氏綱終人なるしと云ゆそ吾首とつて高名小せりと打てうる山城  
う郎あまを討せしと馳双うととる小修理亮う郎等あまた馳來て取龍  
け終り終り山城守修理亮小首ととら終り彼義明朝臣ハ久敷西總州小  
振逆意諸人龍蛇終毒と怨神万民虎狼の害と歎し小忽小被亡て一跡永  
く絶しハ氏綱の武功の程感せぬハなかりける  
十一月廿四日と見由氏政 本土寺過去帳日小下總國相模臺合戦大弓上意御父子  
此地も出張せしとや 一戦也行義為難苦得樂而已  
基頼御三人始申千餘人之打死也 天文七年十月申酉二時之御  
○同書 卷四高野 小武州江戸の住人太田源六資高其弟源三郎源四郎と謀  
て房州の里見義弘と引合江戸の城を責落し永く豊嶋郡と知行し先祖  
道灌跡とつて江戸の城ととるべしと言合七此程終大事終ハ左右

かくハ云ハリ源六ヲ菩提寺法音寺と云法華寺の番神堂小集り神  
と吞ミ此事思定免ぬまゝ二度返りべらうと教白一叔同名義濃守入道三  
樂齋方此由と云つら三樂大悦ハ則房州使者を立て里見殿と招じ久  
義和一國此勢并徳州軍兵と催一々徳州高野基出張のり程に法  
音寺僧太田兄弟の密談と聞て檀師好むと忘れ此由と小田原往進  
依之江戶城主遠山丹州太田誅伐の討手を賜り巴小押寄多間源六兄弟  
相圖相違一々夜小多々此岩付一落行ける氏康河父子不日小打立玉ハ鶴  
此基ハ津波向ある江尾遠山丹波守富永三郎左衛門小高城胤辰小田原  
勢ハ不見先小早らめ川ノ端ヨク押寄てそあたり永禄七年五月七日  
早朝氏康父子伊豆相模中武蔵軍勢を引率一押寄玉ハ曉天小多ハ  
房州の先手ふもとより入り入て中だん小備たり富永遠山高城敵の引と  
思ひけん一もに高き勢ハ臺と一文字小押の有りて一息つて見たる

々々ハと難所引清んと中たん小そをたを去程小江戸の遠山丹波  
子父子富永四郎以下切々入凱色とあつてひひく責のつる房州方  
小松本大膳先駈より黒川権右衛門川善を云大カ兵今度敵小方  
り一太田源六同源五郎同源四郎長南七郎と云と有りとの若そのとも一  
面小打てうう小田原衆ハ敵とハ清次第に退登らんとハ房州衆  
ハ敵と見たり一太石と云う如く一度小叫て切て落す右田源六郎遠山  
丹波守ハ父子此勢と能く打てり遠山と初め進む兵六騎切て落  
一其ハ相州毎双此強兵と云こえ一志水小渡り合ハけ此棒より太刀を  
おられうひひて小のひける餘小無念此ハ又太刀を打おれぬ一と錢の  
棒とハ尺小作り常に秘蔵一けるを後此軍小ハとせ七寸まりの大指を  
打りて打て廻り如何も一志水めを打落さんと乗りまはる處小志水  
終小不見依之口惜やとて甲此鉢胴中とさらハあたるを幸に打てまはる



其一

北條氏康里見  
義弘と國府臺  
みく合戦の圖

渡頭雲氣起輕  
雷濁浪北來勢  
欲顛鼓棹中流  
思往夏滿天風  
雨暗鴻臺  
無名氏



○成田泰詣記卷一

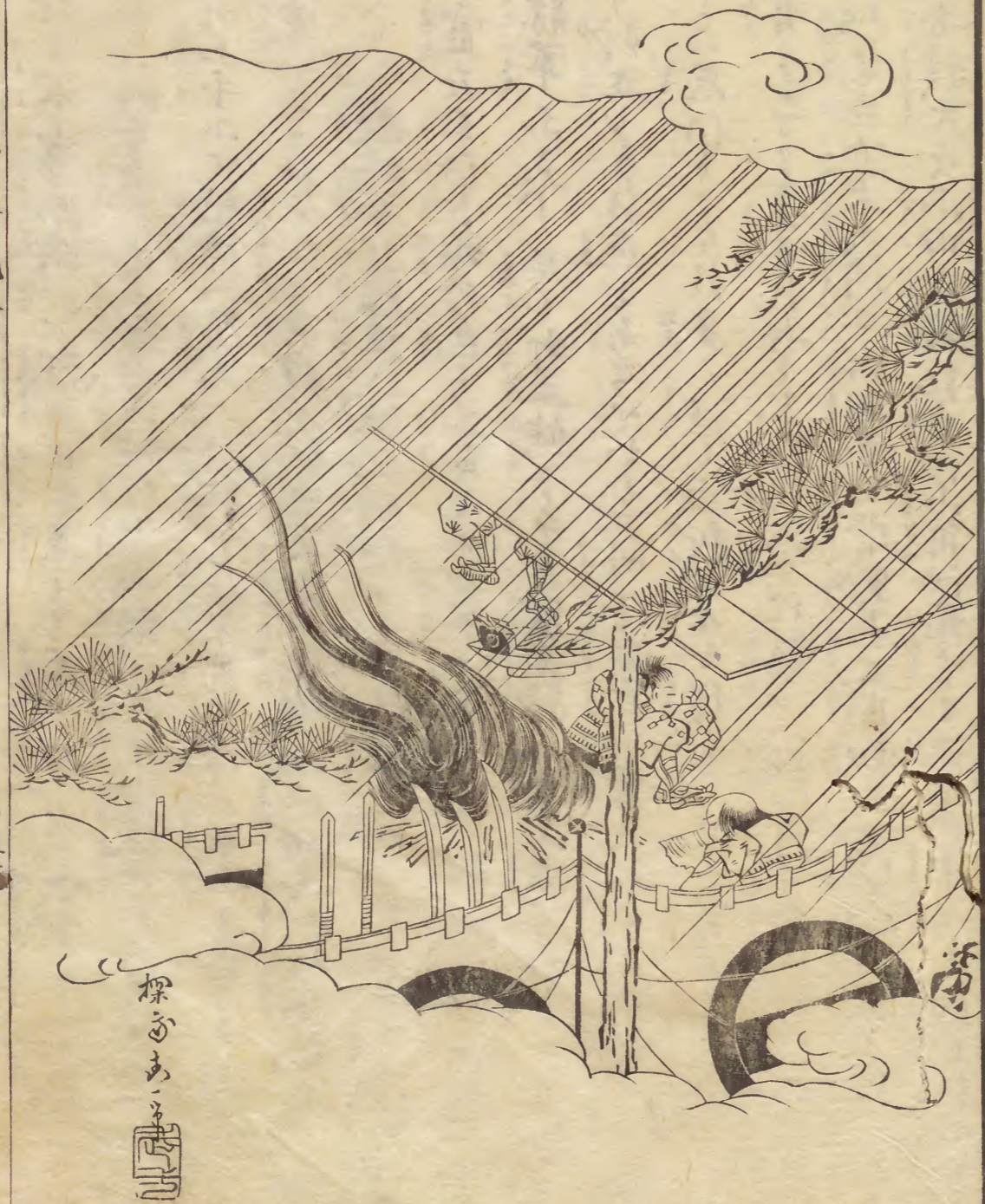
○二十九



無名氏

程小入馬多く打ころさる太田下野守と云人小田原勢の先手なるも一源六  
つありさうと見て是ハ吾輩は源六ありと意思ひまむ乗りを如何小源六  
ハ正方を謀叛と云けるものハ吾輩方ハ何れハ何れにして先非を悔て降参  
せよ余計ハ助ぐべし亦今日ハ振舞ひく免しやうりなうら馬ハ何の科よりて  
打そ人こそ打たぬ馬と多く打倒し奈罪作りなうと一言葉とくけれハ  
いりくも宣ふものうな人計打べし請て見走と開打小志との下野と丁と  
打つ下野も太刀小打て打そむんと思ふれとも大カふるたれく何れたす  
づき前なる深田ころひはつ是と初て松本大膳以下切て懸り突て入れ程  
小富永三郎左衛門山角四郎左門尉中條出羽守河村修理亮と初て小田  
原ハ先勢百四十騎討死し色小引色小成一慶小北條上総介地黄ハ幡旗  
とふびう一横合山切てころ里見殿の先陣荒手小懸たてられ志ころ小成  
て引て入二陣入改て切て出る変に氏政御覽とく上総介討そかつけと

色とくけ御馬と一さん小懸出玉ハ上総介猶氣を得敵中一打て入太  
刀はつ音銃炮の色山川小響むひたり布より上総介敵と目ふけ様  
林と傳ひ龍水と得たさめく四方ハ面小當り戦ひけれ房州勢五十騎  
計討死し上総介ハ本村堀内佐板横江間宮以下主従十四五騎小打なされ  
たり志ころ鎧の袖甲吹返小矢三筋よりけにころと追て進ころ氏政自  
身うけつる玉ひ終小敵と追落し晩に戦小ハ小田原勢打勝るは社とも  
朝の軍に利なりとて遠山と初め討死せけれ房州勢ハ悦ふ事かさり  
日已小暮けさる相引小引く明るハ日房州衆ハ小田原勢定めて昨日に戦  
小随分侍大将とも討死ぬ亦美手手負ぬ今日休息して手負を  
助けぬ自己寄人たらんと油断忘ける小大将も晝に前各鎧ぬく  
べうらす馬に鞍とたろけへらると不れけさとも夕陽小及びり戦ハ定  
て明日たろべしとて高ひほどをたし休けり大將の陣屋小ハ小田原



探ふふふ

其二

をどららるる  
小田原方横江  
忠兵衛大橋山  
城守里見乃  
陣中江忍び  
入る圖



方先手富水遠山と打取目出度とて孟と出酒盛半ふり一處小田  
原方の物見由井源三殿の肉横江忠兵衛と大橋山城守とて一處  
忍の上手小て敵陣一忍不入此躰と懇小見て帰り申上々将軍氏政  
老軍とめさせ太公曰兵勝之術密察敵人之機而速乘其利復疾擊其不意と  
云へり今敵昨日勝軍に悦び油断して居酒盛と初めて最中也折節西降  
り霞たふひき物の色も不見とや打寄て責落さハ何れ子細もなく味方  
の勝軍ふふ下早打立候とて氏康氏政二手小成て両方より切て  
り射立とさせ色とあつておめと叫て責落さハ素に如く房州勢只今敵害  
んとハ思ひもより多々以て油断する程小ありてふためく亦用心忘る  
も有る事とも味方兵にも引立られ散々小懸負里見民部少輔同兵衛  
尉榎木左近大夫同平六同平七管野甚五郎切て出突合名乗つけ一足も  
不去討死小田原勢中にも山角伊豫守と云の申々々昨日合戦小

榎木彈正左衛門と名乗りて度々乗り出味方兵多々突落出糸口措  
存候今日榎木彈正首ととてさものとて皆小語りけるが傍輩とも  
とく人ハさやう此言といはるものなりと割とて果して榎木彈正左  
門の首とりける大將及散々小懸ふさせ自身太刀打馬とも射られ  
うちたち成玉いさむを見て安西伊豫守と云人吾馬より飛下り義弘と  
乗せ申て歩立に成てつき申山中にあつさり上総兵山へ落のびける義弘  
御馬津段に鞍置射殺してありたさのらまハ益りける大將討死とや  
思ひえ勝山豊前秋元將監加藤左馬允長南七郎鳥居信濃守息悪左工  
門佐貫伊賀守多賀越後守引返と三子餘人討死雜兵以上五子餘騎こそ  
打社々々今度張本太田義深守同名源六兄弟のけ申小戦とて薄手少々  
負けは東西小分けて引て行今度里見殿に五代の重寶大さつ方小  
つ方と云太刀此合戦小失小々々此事小田原に聞えさせ分捕の太刀刀

其三



源氏物語  
卷之八

如蘭詩集  
城墟蕭寂古禪宮  
霸氣消亡嵐氣濃  
徒見苔紋埋石擲  
曾聞松樹掛銅鐘  
菱花鏡暗龍池色  
莎草茵留鶴駕蹤  
江水于今惆悵在  
東流日夜咽淙淙  
右國府臺懷古

友野子玉

○成田叅詣記卷一



○三十三

此内と様々御尋ありしりとも不見けりともきこえりも打折やちり候  
小不出と云々云々 節文△くわりさ川はうらえてきたは誤ならん今國府臺の裏道と云々  
頼の誤りと云々 了也と云々遠江川のとありて江戸名所苗舎小玉級日記の云々

安國山總寧寺 國府臺村小あり寺領百廿八石五斗餘 天正十九年奉卯土月地  
禪宗曹洞派關東總録司三ヶ寺に一員たり奉為釋迦如來開基佐々木氏頼徳

三年 關山通幻寂靈和尚此寺も近江國馬場村小ありしと天正三年北條  
氏政はけつらりして關宿宇和田の地小移り寺其址なり 元和三年肉町の地に

移り然る小内町此地を屢洪水に患りけり寛文三年又此地小移り  
稍創建以來寺地の遷移 後小ありたる鐘識不詳なり

○此地は往古國府の舊址として形勢斗絶境地廣大なるを道傍小石に下馬  
札あり佐々木氏頼に賜と云和治の高札あり遠山弥二郎と記ありし小笠  
原左衛門佐基其墓石あり 今越前勝山と云 當時關宿小村と云と云と云り建

○後此山小石擲あり往古國司の物を多し昔時一貴人石  
擲と堀らと云ひととと出たる茶釜銀鈴を寺寶にふあり  
或書小見えたり○此地小大田道灌に植と云榎の大本二株河を下馬  
石と相對せり

房總遊覽志小載と云所此什物目錄

- 一 南蠻鉄茶釜 一金銀鈴 一 懷中守毘沙門天
- 一 七寶燒茶椀 一 赤柵檀釋迦 一 青江下坂鐘
- 一 白玉水吞 一 豹皮陣太鼓 一 古法眼元信畫 松竹梅 三幅
- 一 水府義公書 一 酒井雅樂頭某書 一 隱元禪師書
- 一 西行法師書

大日本國東海路總之下州葛飾郡風早庄市川郷國府臺村安  
國山總寧禪寺者

永平元禪寺六世孫 通幻和尚開闢陳迹四所之中第三之道場也原其濫觴永德三癸亥之歲佐々木六角判官氏賴創建精舍於江州新庄檜原鄉而屈請我 通幻和尚住焉百爾器備僧寶競集兵物換星移至八世越翁時佐々木氏族滅矣惟時諸國爭國列國蜂起因茲享祿三庚寅駿州今川氏之家臣朝比奈備中守教翁住于遠州懸川乘安寺者年于茲是蓋避兵之謂歟至十一世義翁天正三乙亥北條氏政仰翁之道德於本州關宿寄附梵地越聚材命工殿堂玉成再盛通玄道化大振新豐玄風至十七世骨山元和三丁巳初夏中旬洪水逆流陸沈梵刹也達之

台聞

台德院殿大相國別賜梵地賑以米俵千於茲重建梵宇而倍前規也然其境猶挾于二州之間也洪水漲則動罹馮夷之災滿堂毳

侶造次愁之顛沛苦之衆中議云前軍覆轍夫盍鑑邪自非易地我果魚乎 予謂夫推己之心帝匪我

佛仲尼亦好之請移地而令後之住者無愁便相攸於本州國府臺訴之

征夷大將軍源朝臣家綱公於茲寬文三癸卯仲秋下浣 台恩飛

下賜地者方二里程為此境也舞士峰於檐間臨東海於階下杜翁所謂窓含西嶺千秋雪門繫東吳萬里船者也實一方勝概也

又境內有法王坂傳云往昔葬法王於此地到于今石棺猶存也吁何世邪雖無傳記口碑所傳夫豈空邪我室從來傳有法王三昧秘訣憶天機後熟者乎衆與歡抃而移席矣夫以

先佛所廬皆設法器鐘為之先拘留石鐘祇園金鐘寔是龜鑑者也故予欲建立一字而頂鑄梵鐘雖然單力以難辨普叩真俗以成

其功叨綴俚語呂充其銘云尔 銘文

寬文三龍輯昭陽單閑黃鎮吉奠

前永平現總寧二十二世智堂叟 光詔 謹誌

冶工御金屋堀山城守清光

真間山和法寺 真間小あり寺領三十石 天正十九年 日蓮宗池上本門寺に屬す

六門家の一たり本尊釋迦如來 運慶の作全神墨色にして他と異なり 堀基富城常忍開

山八日頂上人 伊与阿闍梨山本坊と号し父八橋伊与守宣時母八駿州勢原孫四郎國重女懐胎の内空

時死去一富城五郎胤継小娘は正安元年卷父常忍胤継示寂を日頂上人に託す

八月十日と出づ終つて其終る所とある一説小三月八日和通の爲小 和法寺過去帳小日頂上人

出て返らんと孰し是なるや墓八富城北山本門寺の西北二丁半正林寺にあり 嘉曆三戊辰八月二日麻

年八十六 此寺元ハ密家少テ空海ヲ舊跡ナリ 故小和法寺と号し 和法大師の像西

改宗の頃云々 真間の地も元ハ市川村の内と云へて文明 新井惣持寺にあり

○元亨釋書一卷小釋空海姓佐伯讚州多度郡人父田公母阿部氏小字貴

物年十八上大學偶逢沙門勤操受虚空蔵求聞持法返曆十四年登東

市川城址圖

康正中千葉實胤之

或書ニ總寧寺ヨリ

東方往古園府

五郎其ノ人ノ居

城アリシカ云云

國分ハ真州在名

ヲトレナリ香取

郡大崎村ニ國

分五郎ノ城址

アリニ地方ト聞

係ナシ誤ナヘシ

○千葉大系因ニ

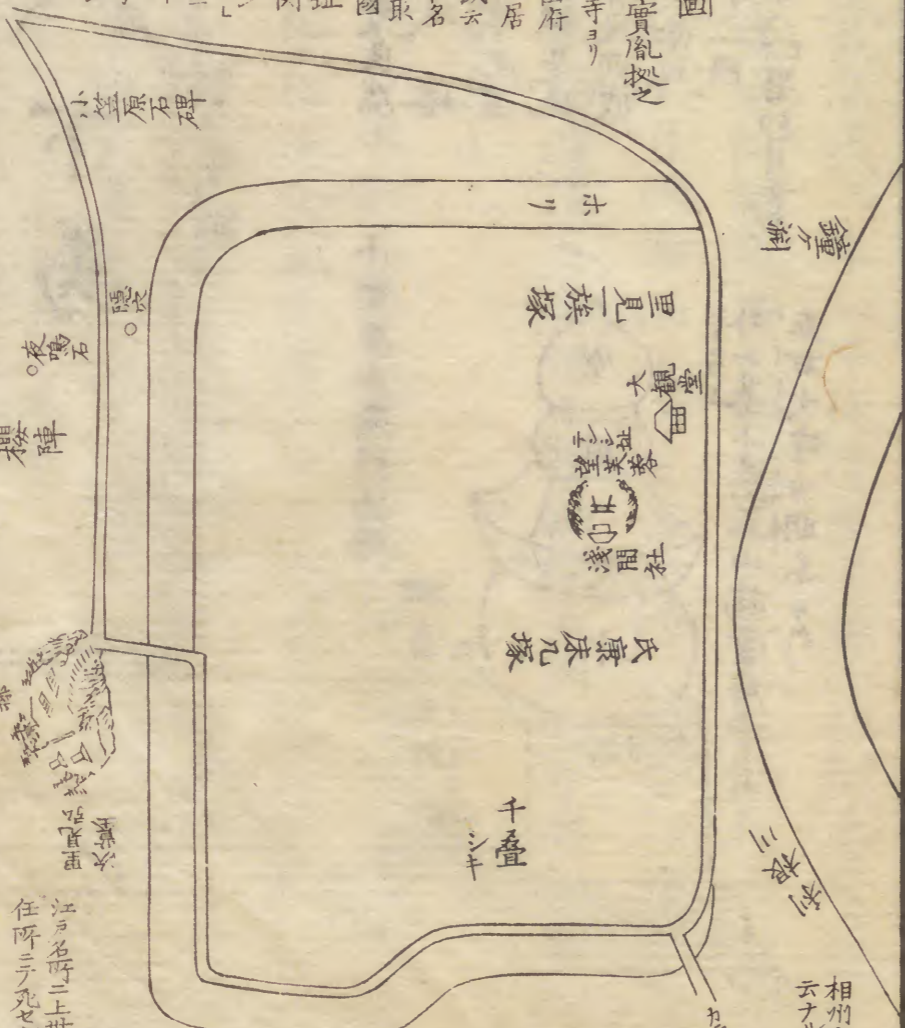
下總國葛飾

郡園分御ヲ分

与ストアリ何レ

カ是ナルヲシ

ラス



或書小鎌倉以降戰爭の懼とありて公家赴任も止果て優なることの葉も傳はらず文明小太田道灌城小取

○成田糸詰記卷一

○三十六



左側  
一世代置之

一世ハ通切リ永徳年中のものに見ゆ  
近江より下徳に運び来りたるなり



山城井堰ノ  
辺モ下馬石  
アリ山州名跡  
志ニ見ユ

小笠原左衛門佐碑

碑高一丈許

伏以爲本慶良然  
大姉奉造立這塔  
樣以至心合掌之至  
心恭敬之御願是地  
依善巧速菩提到彼  
岸必信良久而白  
中在黃金充一國  
于時寛永十八巳曆卯月言辰



大寺壇受具足戒二十三年從遣唐使藤加能到長安城請青龍寺東塔  
院內供奉慧果阿闍梨果喜曰我先知汝來相待久矣兩部大法秘密印  
信皆悉付授又召供奉画工李真等十餘人圖金胎諸曼荼羅一十鋪鑄  
工楊忠信等新造道具集經生諸秘經大同元年歸朝兼和二年三月廿  
一日入定年六十二

○類聚國史十<sup>百</sup>八 承和二年正月壬子大僧都傳燈大法師位空海奏曰依  
弘仁十四年詔欲令真言僧五十人住東寺修三密門今堂舍已建修講  
未創願且割被入東寺官家功德料封戶千戶之内二百戶<sup>甲斐國五十戶</sup>  
以充僧供爲國家薰修利濟人天許之<sup>以上二書より考らば下總小寺を創りて</sup>  
其報恩の爲後小寺を建和後寺とも名つけ<sup>見えされとも以百五十戸充僧供と云文あり</sup>  
一々此志古の百五十戸は肉なりん

○御書三十 真間釋迦佛御供養遂狀  
釋迦佛御造佛の御事每始曠劫より未だ顯りたまぬ已心の一念三年

○成田叅詣記卷一

○三十七

の佛造り頭一はします、馳系りてたぐみ奉せ候とや欲令衆生開佛知見、  
然我實成佛已来、是也但佛は御開眼の御事ハハ、伊與房ともて  
や、奉りてせ給候、法華經一部御佛は清六根、入り奉りて生身は  
教を尊ぶふ、参りて、迎へ奉りて給へ自身并に子に非さ  
社を何んとも存作所願の志、大進の阿闍梨、て候之候  
もねみ結縁、まひらせ候へ、つとや大黒と供養、其後より世  
間おけ、後々たふ、此度ハ大海の志、満ち、如く月が満ち、  
く福さ、命ふ、後生ハ靈山と思へ、召せ、九月二十六日、日蓮、進上  
富本殿御返事、  
△什宝目録、生身佛御厨子入  
其祖開眼富本殿造り  
録外御書、大黒送状、大黒供養料、性給候畢、  
本文三月十日、日蓮、富本殿、  
○大黒は、大己貴の音也、体と負ひ玉ふる、古事記、小己之軍神、ハ神功記  
小己之天皇、伊勢、小大黒岩あり、於聚本源に、大國玉也、と云り、○大黒天

神ハ儀軌と考り、小頭ハ帽子と蓋り、左手に囊ととり、右手に椀印となす、  
一、み、摩竭持椀、餓持袋と、ハ此二鬼と合と、也、存葉小載、  
○大黒天、南、南海寄帰、傳佛祖通載、ハ、新譯仁王經、小祀塚  
間摩訶羅大黒天神、青龍疏、小大黒天神、闘戰神也、或書に、  
子院十餘あり、覺り、坊大、林坊、真、浄坊、養、善坊、亀井坊、松本坊、東坊、善  
林坊、浄蓮坊、外、小華藏院、又、寒室と、ハ、地、小龍泉坊、安立坊、安國院、玄授  
院、等、北門、志、  
△市川村の、小字に、根本と、ハ、地、  
永享十二年、胤直、文書に、真間、根本、寺、別當、職、享德五年、胤房、文書、真間、根本、寺、  
○寺記、小、舊、天、台、宗、う、て、あり、△權、大、僧、都、了、性、富、本、胤、繼、△問、難、△小、△退、  
院、△寺、中、并、末、頭、評、議、之、上、相、定、住、職、御、禮、無、之、年、頭、御、禮、大、廣、間、獨、禮、座、一、  
同、御、暇、無、之、  
○成田參詣記卷一  
○三十八



都良

日頂上人本尊と授るの圖



什寶目錄抄 要と  
摘む

大黒天 高祖作  
厨子入

頂師劍

松蟲篁

袈裟 往昔天台宗の時住僧權大  
僧都了性法印の所持あり

高祖一代五時之圖 二幅

同御消息 二幅

同御消息 五通

尊師御

消息 一通

十六羅漢圖 晁殿司  
筆ト云

光圀卿消息 一通

楓橋遺笈 一卷

菊池

武房旗并 由緒書寫二卷

源義家弓傳書

古文書目錄 此年次述へるもの多し  
姑く古きもの改む

元享三年五月一日下總國八幡庄蘓谷郷云々

大永七年卯月廿日古來之檀那之事云々

天文四年乙未菊月三日於當寺家以後迄云々

永祿十二年己巳年二月十九日制札

無年号辛巳九月十九日制札

無年号丙子二月十四日制札

享德五年六月廿日下總國八幡之庄真間和法寺云々

享德五年六月廿日下總國云々散地如前云々

享德五年十月廿五日下總國八幡庄真間法華堂根本寺領事

延徳四年九月一日下總國八幡庄之内云々

天文二年五月一日當寺之散地之事云々

平花押出

沙弥祥仙

花押遊

亂辰

亂辰

亂房

平輔亂

亂隆

祥仙

遠山

原式部大夫胤清

杉左外四人連名

貞胤

左衛門尉

平胤繼

大隅守平胤

平花押出

胤直

胤房

天文七年六月廿八日下總八幡之庄之内云々

四月廿日御門前之御手作云々 天文七年己亥

無年号四月廿八日真間山和法寺

無年号卯八月十五日真間御寺下之草刈云々

無年号六月一日遷往國府真間法堂事云々

嘉曆三年三月十四日真間御寺御寄進田地云々

觀應元年七月十一日奉寄進下總國千田庄云々

三年卯月四日蘓谷郷秋山村内云々

康曆三年二月二日國府真間法堂地事云々

永享十二年十月廿五日下總國真間根本寺別當職云々

享徳五年六月十四日下總國葛飾郡八幡庄之内云々

古碑七株

正和三年卯七月日 曆應第五天 文和三年甲七月 明應八天祀六月廿三日隆

真間浦 又入江濱井 継橋 上真間小多 湏和田 打廻 一 ある所の沼澤 是古

への真間の浦あり 此は南の方小細流あり細流より猶南北汚田を昔、真間

此浦の内なる 此浦は村も其あとありと云後、非多しむりのさま土地を踐て論まきあり

二ヶ村小を注す此溜井 此の方と堰向村と秘元の字ハ

紅塵集上春部 古の石にやまもろけん 面影もほのふらうふきの紅白 千陰

同秋部

等よりたうらわをのこはりともつを秋を月傾さぬ 真淵

琴後集秋

月小くもあつらうむらみしきり入江の秋はうらたき 春海

真間継橋

弘法寺の下に細き流小打渡せる二つの橋に中ある其間へり小橋

△南留別志小継橋と継橋と云ふ流をすくむ地を長と云へり其流と攝津に渡り継橋

葉集の安能於登世受と云歌に意少く馬をも往來せしと見ゆれ

古ハ餘程大なる橋ありしや

○安能於登世受由可牟古馬母我可都思加乃麻末乃都藝波思夜麻受可欲

波牟

万葉十四相聞注末歌 ○畧解 小豆音せき之川に狭き小板一ひらうち流して是と

先り其橋とありて忍て妹小行人小

紅塵集秋

志は原小玉もかりえんいさ月をみわらるまを能結は 枝直

いまも程忍ひえわらるるとあまのい訓えまのつま何 千蔭

春臺文集

継橋記

江戸名所図会 豊後小川のこ

古に中々此徳乃ちあぬの粗

歳をくも佛道とありて六

福智の二殿具より其獲成

十帝制乃作と信作せしを

いふ事かす事をもはあは

堅固の思とありて十年をけえ

此後なく長者とをせぬく

方便のけりて世をむとあり

うきき事とありてよく秘計を

めくきをぬく寺に今世

得現果報と移る空閑く

世の富土の事方丈は

い河に心教三神系四方

於波門流石大耐人下

本をさ下位共回寺正

義論伏しを道徳伏杖神

二麻摺二年庚申三月廿三

砂心

砂心

永仁五

十月三日 日暮

此相之そのまふふとて一を  
てはり合候もあひまけり  
二ふに佛もあつてははれ  
申へりてはりてあまはれ  
かきつるもてはりて  
此相は形も倍一とて本國の  
は花は信とて借事とて是事とて

立申 相續文章

右目樹をむきててつたお年おは  
志ふ浅思名なるもとてあはれま  
あはれりてはりてせりてはりて  
みとてはりてはりてはりて  
とてはりてはりてはりてはりて  
とてはりてはりてはりてはりて

ま〜〜〜又お仲人さんとの後云  
の〜〜〜おま〜〜〜かきつるもてはりて  
あはれりてはりてはりてはりて  
はりてはりてはりてはりてはりて  
はりてはりてはりてはりてはりて  
はりてはりてはりてはりてはりて

五和江年 卯月十日 日暮

真向樹

けふ運候五時より  
口物とてはりてはりてはりて

成田泰請記卷一

四葉 卯月十日 日暮

阿蘇大明神  
一尺三寸  
中二尺五寸  
一尺五寸  
天満大皇在神



一切本見也

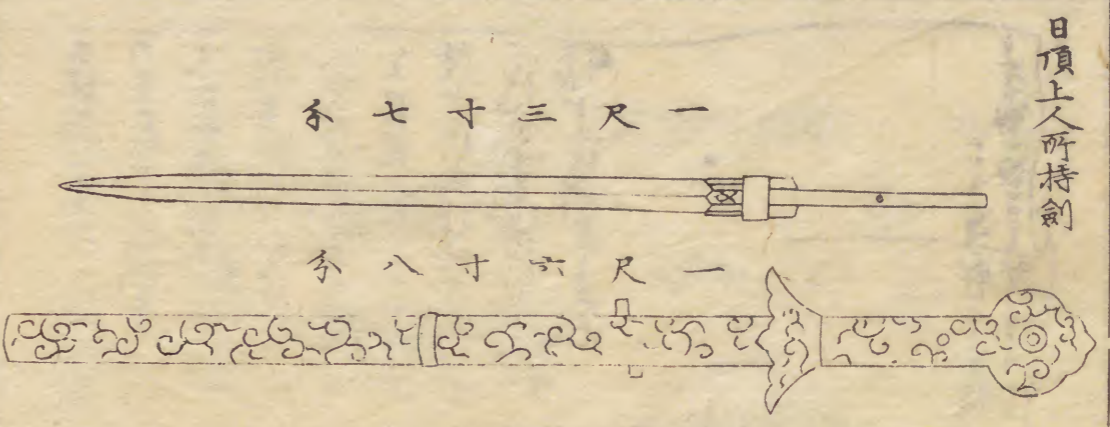
五勝間七三三丁九代隆春  
の子菊池十代武房一尺一  
文永和安両度の合戦の  
對馬筑前におきて蒙古  
人と討平け日布武名  
と異國お施り十代時  
隆十代武時法名寂阿十  
三代武重十四代武上  
又或十五代武光と見也

細名目 國字十六口當家子代隆春仁盛 旗幟尺口不知身係十車成月  
語一  
長か  
短か  
三寸  
二寸  
一尺

〇四十二

東都之東入總州四十里許其地曰繼里曰橋名也繼之為名區尚矣自山赤人橋蟲生歷世詞人皆詠歌之何咏歌詠歌氏胡氏胡者何女子名也曷為詠歌氏胡其說未詳以里人所傳氏胡早喪母繼母不慈氏胡事之孝繼里瀕海水井皆不食唯有一井寒泉可食氏胡日汲焉以養繼母有少年見而從之闕其人就闕氏胡家者數矣繼母覺之以為盜而氏胡為之內應於是毆氏胡辭不釋毆之幾乎死氏胡乃走自投橋下而死里人哀之收而葬之封土樹松以識之謂其橋曰繼橋謂其井曰繼井以懲繼母之惡也墓也橋也井也於今猶存云其後僧空海東遊留乎此里人因造寺為海謚弘法故号弘法寺後廢有僧日蓮修之今見存繼橋在其下繼井与胡墓皆在其東北百步之内自數百年之後海變為田繼里今南去海可二十里登弘法寺則平野漫漫東方不見其所極西望東都則城市人煙

祝者早...  
 此是乃...  
 日乳



廼在目中實勝概也弘法之西北有總寧禪寺官刹也未至弘法里  
所有関河爲東岸赤壁數仞可觀矣余与藤東壁以丁酉之十月遊  
繼里東壁之季父爲僧在弘法寺回宿其房而歸既悉故事矣於是  
乎記 △或云此遊係  
享保二年

鈴木長頼所立碑銘

△長頼、當時日光奉行と勤め、と云日家の信者  
と見ゆ其子孫今要人と稱し高五百名山伏井戸に住す

繼稿 繼紀貞察 維文維稿

詞林千載 万葉不凋

鈴長頼立碑勒銘  
元禄九丙子仲春

住持上人日貞識

真間井

同所北の山陰小鈴木院と云草菴に傍しある古のものなりや

ならぬ

△手兒奈別記畧起小亀井坊  
の境内ふありいす龜井と稱す

瓶甕可汲 固志何傾  
鳴呼節婦 与水冽清

鈴長頼立碑勒銘  
元禄九丙子仲春

住持上人日貞識

名所今歌集上

同 さき左社にむすふいふにさうめたるおのり水 蘆菴

手兒奈墓 或書に繼橋より百歩許り東に方にあり墓表小松樹一株存せり  
後小傍に祠と立手兒奈明神と号し毎年九月九日を祭日とすとあり何れ  
たるるふや相傳ふ文龜元年九月九日弘法寺在任日興 一作 上人此祠を創  
建らむ一因ふり其日を祭日と云

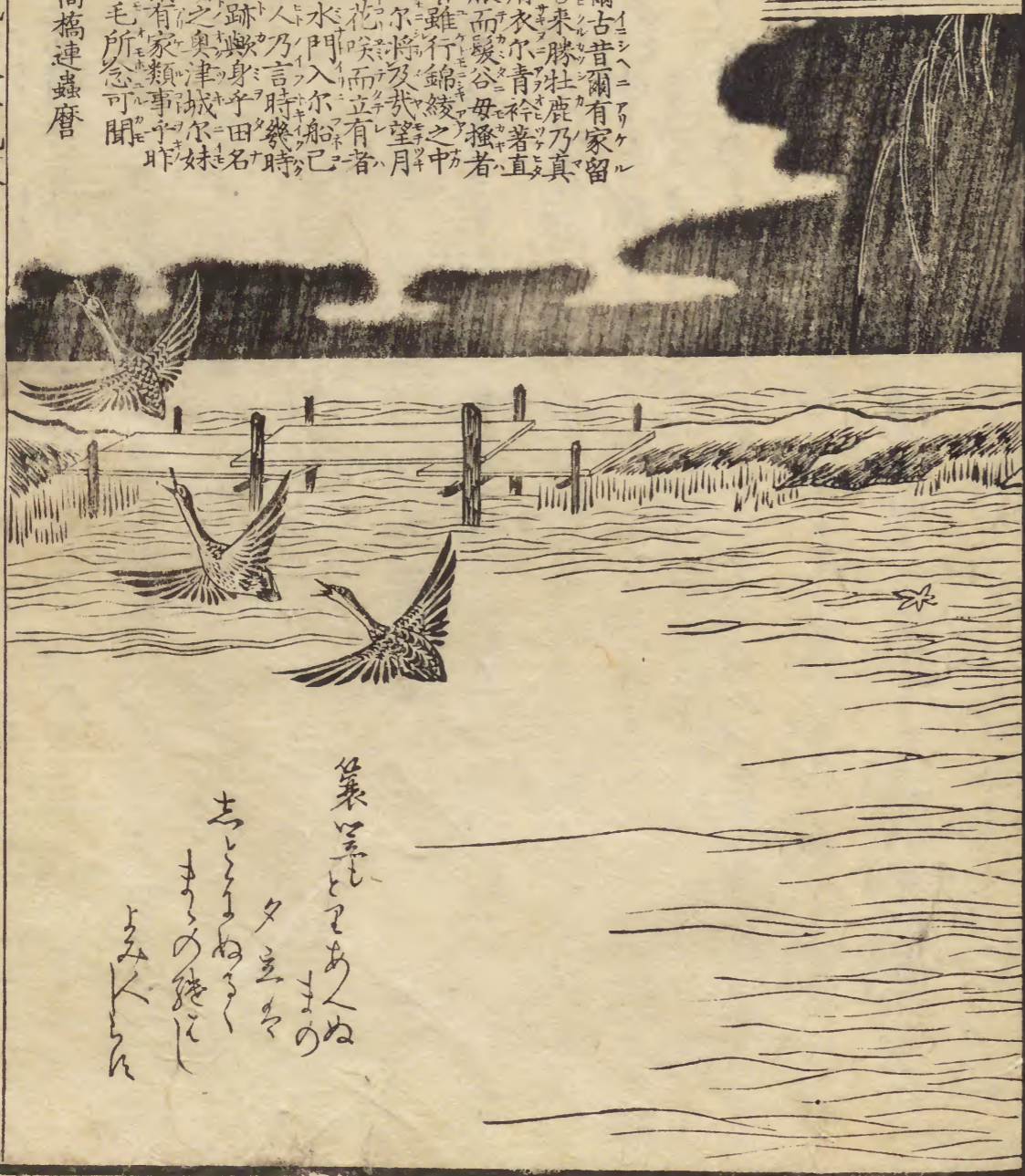
○手兒奈別記小抑てさふ入江小舟と沈たふりし時代も有らん



萬葉集卷九  
 鷄鳴吾妻乃國爾古昔爾有家留  
 事登至今不絕言來勝壯鹿乃真  
 間乃手兒奈我麻衣爾青衿著直  
 佐麻乎裳者織服而髮谷母搔者  
 不梳履乎谷不着雖行錦綾之中  
 丹還有齋兒毛妹爾將及我望月  
 之滿有面輪二如花咲而立有者  
 夏虫乃入火之如水門入爾船已  
 具如久掃香具礼人乃言時幾時  
 毛不生物乎何為跡身乎田名  
 知而浪音乃驟湊之奧津城爾妹  
 之割勢流遠代爾有家類事乎昨  
 日霜將見我其登毛所念可聞

高橋連蟲曆

○成田恭詣記卷一



兼業  
 夕立  
 まの  
 まの  
 まの

○四十五

手見奈  
 真間の  
 入江  
 身と投

桂園一枝拾遺  
 若れもの  
 女郎  
 之も  
 景樹



廣信の煙

と尋ふ多葉考六赤人々手児をよめり歌ふら初小至りて天下の  
始の頃の歌なりと其歌小古ふありせんふといひしうら此少女の飛鳥岡  
本の宮の頃小有し成へて云て舒明帝の時と治定せりその證は十四葛飾  
解ふ本居り後と攀ふ小此歌はてふふ在世時のり小あらは古のまは  
てふふと吾小似たりと入れりふふまことと悦へる女の歌なるといふ後  
はてくを往古縁起小允恭帝の時よてふたふ入はふ身と沈たりといふ  
少く叶へり此のたの様は小も飛鳥岡本宮の頃の調子を往ハ舒明帝の時と定  
又そのく手思念り身と沈たり時ハ此山既小寺地も有けん  
又在家此地も有けんと千載の後を尋ふ實小知り  
地主度こころ時ハ墳墓さう終て田畑なりりて千載不

改地ありんされりてこころ身と沈已前を此山ハ寺地も有けんありけ  
めし思推古帝四年帝不徳太子捨舎を管て祈推古三十三年に至りて寺  
ハ僅小四十六所僧ハ百十六人尼ハ五百六十九人ことつる葛飾の真間古の  
國府和名鈔五下徳國府在葛飾云今真間山一丁所之なるを府中六所といふ社あり  
國府ハ縣よて朝廷は御料地を往ハ居付て國政ととる國造縣主な  
とありとも又都も諸役人の往來さることありハ都も至て解華の  
所古事記成務天皇御代小建内宿禰為大臣宣賜大國遠朝廷とも都の都とも  
いふ所の土地ハ畧解三上七速朝廷其國之國府又西國とてハ太宰推古卅三年  
後ハ此山寺地も有けん也國史畧孝徳天皇の下推古以來佛教壞  
三十二年 舒明元年 或ハ 推古帝の時ハ寺地も有けん也聖武帝の天  
小たり五年なり 聖武帝天平九年の後寺地も有けん也聖武帝の天  
海州造丈六釋迦像及菩薩像并寫大般若經一部六百卷是國分寺の權輿なりありしは  
此頃なり諸國小寺多くなり也舒明帝元年より天平九年小たり  
○成田泰諸記卷一 ○四十六

百九年 推古帝以來漸々小僧尼をばほく寺院をあたふ山あり行も唯々

佛教を弘通さる靈場して何宗と治定したるるんたりとみ内當山を

延暦二十四年於後小天台宗と定りけんがその以前何宗と定りし事ハタリ

しとみゆ 今謂手見奈身と沈たふ 允恭の時とて天平九年に在り三百十六年

らるて二百年余は之とて身没して墳墓を守り失はさんて此山天台宗とあり又四百六十年とて法

の附とてと勝れたるとして身没して墳墓を守り失はさんて此山天台宗とあり又四百六十年とて法

華宗とあり 延暦廿四年より文和元年まで二百三十八年とて當山守後律とあり舒明元年

り文政十三年ゆかりて一千二百二年をりての久八腐肉のつとて其名をやちて後

手見奈とてさへひふふりて身没して衣たふも之を地女たふかく千載の後ゆも人ふと

られあふたふたふとて貞婦の徳とらひをうらまふ凡人のなふ所なるんや千載の後名を

たふとて金位の道と得たり

真間手見奈とてつと所 橋戸山向ひて右側小古松樹あり是てとてふれくつと所の

万葉集卷三山部宿禰赤人の歌と吾毛見都人尔毛將告勝牡鹿之

間間能手見奈之奥津城處 万葉考ふてとて六果子のふと畧とてとてふてとて愛見の

管麻呂の從てこハ男女小通して幼稚の子とも母の手とてとて母の跡とてお慕ふも

のふれ手見のふい坂とつふも有めてとてとてハ男女小通して稱をたふたふとてとて

つと古事記傳にオクトハ地下ヲ云ニツハ助字ニキトハ死人ヲ藏ルル処ノ名ニ紀小

六所明神社 同所ふり 社領十石 天正十九年卯十月此朱印もと

年八月十二日とて葛 社傳ハ正殿ハ大己貴命合殿伊弉冉尊素盞鳴尊大宮賣

尊布留之御魂彦火瓊杵尊なりと云 景行天皇四十一年五月五日の鎮坐

なり九月十九日二十日と二日於神事あり祠官と桑原和泉と云 市川内根本國分内六

東鑑卷一 治承四年十月十六日條小相模國府六所宮云々 常陸二所社ハ國府

波邊小あり申斐於六所社府中より十四五里とてと云 又田原和村共感乎

山州名跡志卷五小六所社ハ諏訪稻荷由木等の神なり云 三里許南に方鏡

總社傳記考證小六所社号ハ寛文三年卜部朝臣兼連卿より書て給り

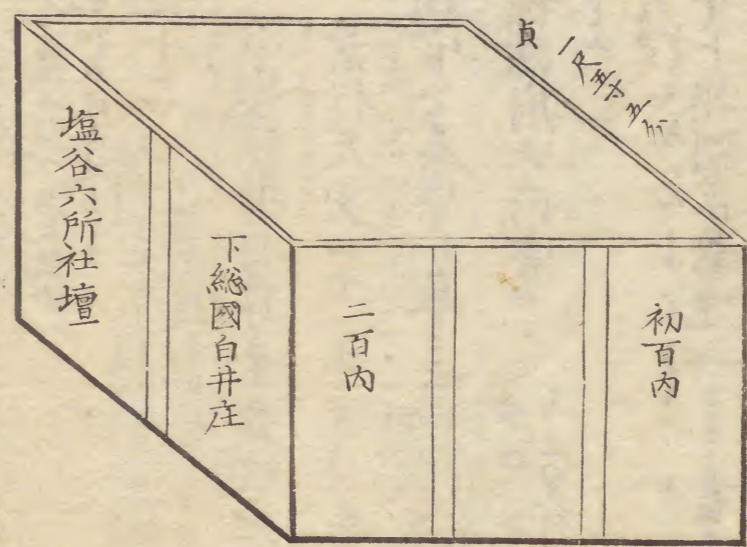
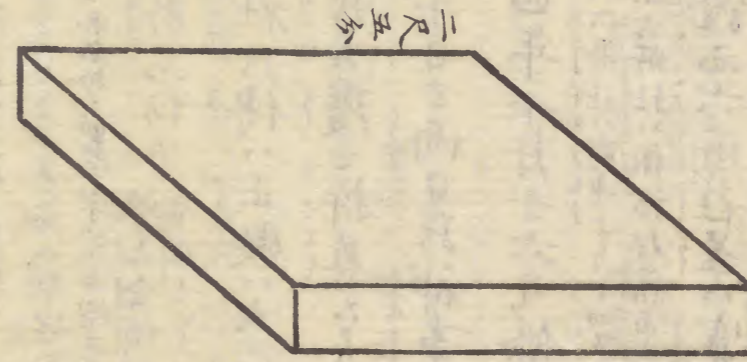
ことあり云々 和訓乘小式部御所六所の社ハ豊後國海部郡小あり早吸

日女社トて社代紀の六社と祭るふりとも稲荷考へ

香取郡並木村神宮寺大般若經箱

の社領の朱印小 有徳公手印幡郡と記あり此塩古と因あり  
 角八皆布キ七漆塗ハケタリ

貞治二年卯癸六月日  
 一尺三寸



此処  
 足ア  
 下  
 下

今度小田原出善法并牛久由兼同封社  
 作付方御善法代松尾徳之助公御書報  
 大切儀方 工書字程をうめ古来入之取迄  
 云跡取ありていし奇なりてめ付社御書報  
 尚心人足お海の中瀬名おて成るをたじき  
 の者云標ゆきお程お書別言お遠てお書  
 等書お高はてお付以上

牛久城番六天正余ナリ

五月十八日



成田

寺社

胤吉印之ドモ代用シト  
 見ニ常陸江戸氏ノ文書ニ  
 モソノ例アリ  
 春村云印三顆アリト見ニ一ハ  
 小一ハ大ナリ共ニ胤則代通  
 シ用ヒラレタリ

制札

於了下位國院訪國事  
軍抄甲乙仁巡坊狼  
藉之事  
右等事付旨遠程に申す事  
下等泥料状如件



九月十七日

符中六所宮

神主

里見義通永正十八年高城越前守胤  
廣ヲ打テ胤廣父子其臣畔藤彦五郎  
田島國書助等打死ノ本土寺過去帳  
里見系四等ニテリ後此地北條氏ニテ  
タリト見ユ  
府中六所ト云テ此地方ノ國府タルコト  
瞭然ナリ

禁制

右軍勢甲乙人亦巡坊  
拒籍望令傳止テ此等月  
控着五ノ志速搦捕出難本  
第下中下下起遊科志也



山南形意為

神主屋敷

印文祿壽應穗  
猶外ニ通リ同文ニバ畧ス但  
名當六府中六所トアリ

六石之大野神社、寛文二年、  
古神主、故、屋敷、四百五拾坪、  
未代、八、廿、二、也、何、何、使

申  
控、拜、拜、拜

細井金三郎

久光

細井、甚、以、以

正藏

須知園神主及

形、り、後、強、く、  
休、り、り、り、り、り、り、  
意、り、り、り、り、り、り、  
形、り、り、り、り、り、り、  
法、り、り、り、り、り、り、  
り、り、り、り、り、り、  
り、り、り、り、り、り、  
り、り、り、り、り、り、

り、り、り、り、り、り、  
法、り、り、り、り、り、り、  
り、り、り、り、り、り、  
り、り、り、り、り、り、  
り、り、り、り、り、り、  
り、り、り、り、り、り、  
り、り、り、り、り、り、  
り、り、り、り、り、り、

中中中中中中  
の代々の代々の  
地方の地方の  
神々の神々の  
おしおしおし  
おの神々の神々  
とてとてとて  
法法法法法  
九月七日

乃七の  
法神の

はな山田原  
付るもの  
なまの  
上まじ

卯月



次和  
神

天正  
八年

一日

中七

はな棟別  
為あ  
不入  
申付

中葉  
時分  
ら  
儼  
得  
古  
斗  
回  
ら

代六不左助神主能  
以不述如古來可為  
不八以為清一札進不  
仍此伴

己卯  
九月某日  
御所

神主後系

吉田佐太郎國初御代官之當時陣屋之真間村ニリシ  
トノ真間條見合スベシ

法年負之辭也  
以上百姓候之儀  
出教之由之  
百有六日奉儀也

高城家畧傳ニ小金城三代下野守胤吉法名傳照玄心大居士永祿八年六月二十日卒四代下野守胤辰法名関相玄酬大居士天正十五年十一月十六日卒五代源二郎胤則法名庭室玄柏大居士慶長八年八月十七日卒

國分山金光明寺 國分村小あり藥師堂領十五石二斗餘慶安二年己丑八月新義真言宗京師醍醐三寶院小屬元八支院廿六本尊藥師如來五像六尺余元地八昔堂宇ありしを

聖武天皇の勅寄なり又釋迦堂小丈六丈六の尺八唐尺小尺なりを一尺ハ曲尺の六寸六分六厘小當りの釋迦の座像

并に左右の挾持二軀樓門の上乃古き釈迦坐像ハ共小此 天皇の寄り所と云中興ハ紫海法印と云寛永十六年十月廿四日示寐云續日本紀小神龜五年十二月金光明經六十四帙六百四十卷領

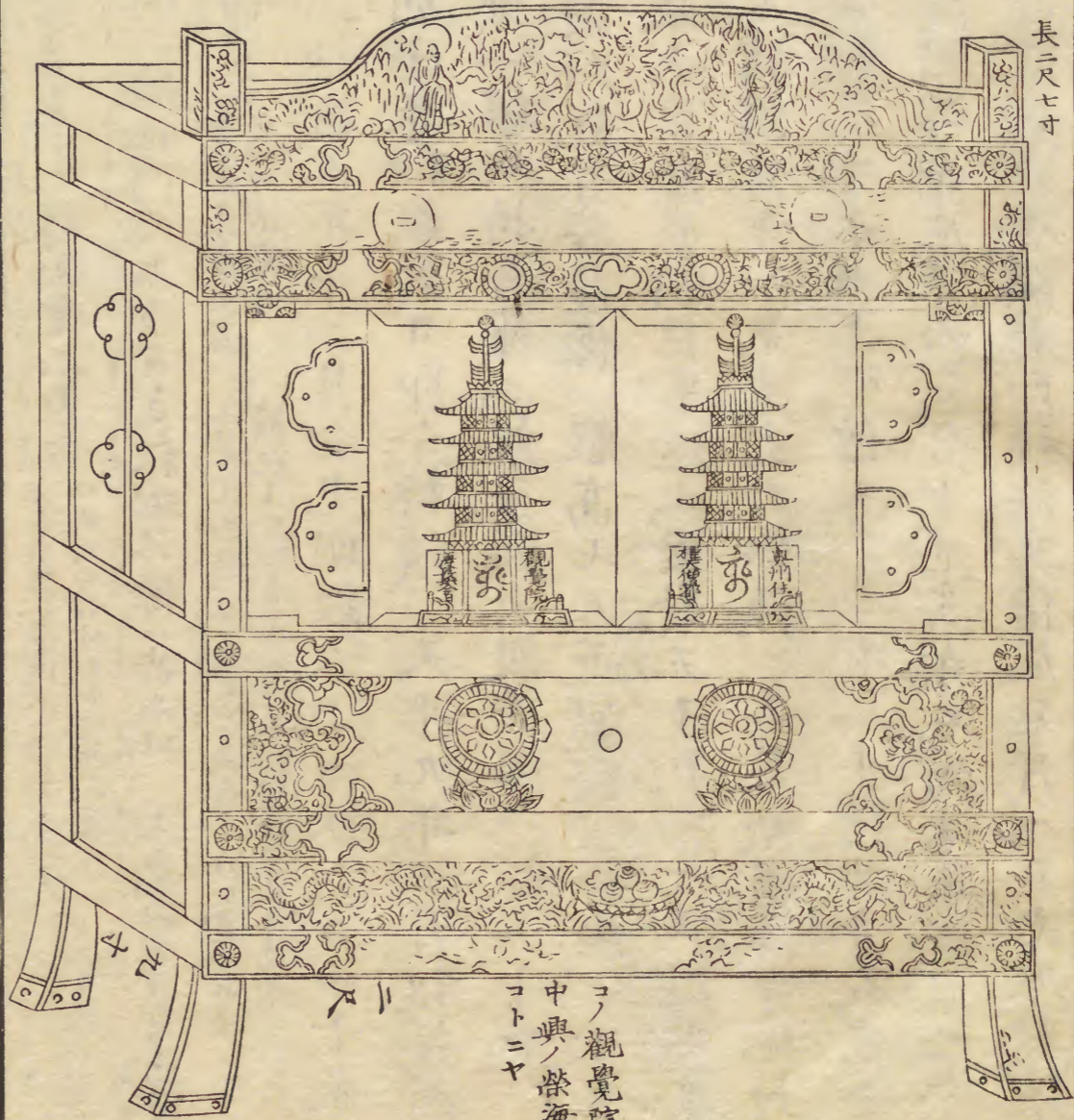
於諸國國別十卷中經到日即令轉讀 天平九年三月詔每國令造釋迦佛像一軀挾持菩薩二軀兼寫大般若經一部一十卷 十二年九月國別觀音菩薩像一軀高七尺并寫觀世音經 十三年正月故大政大臣藤原朝臣家返上食封五千戸二千戸返賜其家三千戸施入諸國分寺以充造丈六佛像 三月每國僧寺施封五十戸水田廿町尼寺水田十町僧寺必令有二十僧其寺名為金光明四天王護國之寺尼寺必令有十尼其寺名為法華滅罪之寺兩寺相去宜受教戒若有闕者即補滿其僧尼每月八日必應轉讀寂



古笈の圖

此地昔堂ト字ス  
林藪ノ中ニ夥シク  
敗瓦ヲ山積スサレト  
天平ノモノトハ見エス  
又礎石各所ニ散在  
ス其巨偉當時ノ  
虚費想スルニ足レリ

可翁瀧見觀音  
馬遠花鳥  
陶以政桃画



長二尺七寸

コノ觀覺院ハ  
中興ノ際海ノ  
コトニヤ

勝王經每至月半誦戒羯摩每月六齋日公私不得漁獵殺生國司  
等宜恒加檢校持國ハ地名小殘ナリ其餘ノ三所ハ何方ナリヤ今知スハ良 十七年九

月甲戌令京師及諸國寫大般若經合一百部又造藥師像七軀高  
六尺三寸并寫經七卷 天平勝寶元年秋七月乙巳定諸寺墾田

地諸國分金光明寺寺別一千町諸國法華寺別四百町 天平寶  
字二年秋七月戊戌勅國別奉寫金剛般若經三十卷尼寺十卷恒

例金光明寂勝王經並令轉讀今昔物語二十六小今昔藥師寺國大和の家勝會と  
行んた免小弁源某と云人下りて七日終り一京にク 又卷廿 太后仁慈志在救物創建東大寺及天

下國分寺者本太后之所勸也  
延喜主稅式小國分寺料五万束藥師寺料三万五千束文珠會料

二千束  
類聚三代格卷三小國分寺事 勅朕以薄德忝承重任未弘政化寤

寐多慙古之明主皆能光業國泰人樂災除福至何修何務能致此  
道頃者年季穀不登疫癘頻至慙懼交集唯勞罪已是以廣為蒼生  
遍求景福故前年馳驛增餉天下神宮去年普令天下造釈迦牟尼  
佛尊金像高一丈六尺者各一鋪并寫大般若經各一部今春已來  
至于秋稼風雨順序五穀豐穰此乃微誠啓願靈貺如答載惶載懼  
無以安寧案經云若有國土講宣讀誦恭敬供養流通此經王者我  
等四王常來擁護一切灾障皆使消殄憂愁疾疫亦令除去所願遂  
心恒生歡喜者宜天下諸國各令敬造七重塔一區并寫金光明寂  
勝王經妙法蓮華經各十部朕又別擬寫金字金光明寂勝王經每  
塔各令置一部所冀聖法之盛与天地而永流擁護之恩被幽明而  
恒滿其造塔之寺兼為國華必擇好處實可長久近人則不欲薰臭  
所及遠人則不欲勞衆歸集國司等各宜務在嚴餉無盡潔清近感

諸天庶幾臨護布告遐邇令知我意又有諸願等條例如左

一每國僧寺尼寺各可施水田一十町

一每國造僧寺必令有二十僧其寺名為金光明四天王護國之寺

尼寺一十尼其寺名為法華滅罪之寺兩寺相去宜受教誡若有

闕者即須補滿其僧尼每月八日必應轉讀寂勝王經至月半誦

戒羯摩

一諸國置上件寺者每月六齋日公私不得漁獵殺生國司等恒加

檢校

一願天神地祇共相和順恒將福慶永護國家

一願開闢以降先帝尊靈長幸珠林同遊寶刹

一願太上天皇大夫人藤原氏及皇后藤原氏皇太后子已下親王

及正二位右大臣橘宿禰諸兄等同資此福共向彼岸

一、願藤原氏先後太政大臣及皇后先妣從一位橘氏大夫人靈識  
恒奉先帝而陪遊淨土長願後代而常衛聖朝乃至自古已來至  
於今日身為大臣竭忠奉國者及見在子孫俱因此福各繼前範  
堅守君臣之禮長紹父祖之名廣洽群生通該庶品同解憂惱共  
出塵籠

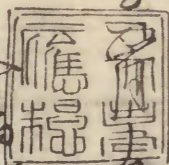
一、願若惡君邪臣犯破此願者彼人及子孫必遇灾禍世々長生無  
佛法處 天平十二年二月十四日

○鐘識小 清和天皇之世權少掾貞世新鑄鴻鐘一口以篋蘆而后秘  
密之教風盛興云々建長八年丙辰九月廿四檀越平氏再獲梵鐘  
聖武之世以來千有餘年鑄鐘三矣云々寶曆三酉年三月沙門亮  
英謹誌傳燈大阿闍梨法印勝快とあり古昔香華の感なきと推知  
る一寺内小礎石數箇あり昔堂と稱する地より堀出せしと云  
寺昔堂ハ

所藏文書

制札

右軍勢甲乙乙未盃  
好粒籍奉望之信也  
若遠犯等之速也  
至及此科之由候件  
子御書 在左局



全高  
五寸

金五小金十ルシ 子蓋天正六年寸名

園分寺之事者一旦任運云々毎度  
仕運法堂造営掃地勒行可被作  
付此科對貴寺於遠宵推考以云々  
此心不撰考賦也告進於下以并如  
前々守護不入後至云々相違下對更  
法所全畫和云々傳云々云々因法堂  
云々字云々要云々後日以札中展下  
仍如件

五十三年乙酉

二月三日

胤則

園分寺

法回宗布

手付申書

一 國分寺之事古來便往近年志  
 清少之形儀等一或不振庭掃除  
 等事之振在家同之等事  
 一 御堂遠家等住之衣被等念是亦  
 大破之形也為伽藍之念思役松松  
 松等事攝住施庸日地等之竹木致  
 伐等事之在夜修好等事  
 一 十一坊之形之修之等事  
 付付如長米等任由等事  
 一 自去願當住任住置等事  
 仕置堅固不化之付寺塔之修在由  
 傳等事之由是等事尚信建之等事

寺之圓形破折外等之節目を承在等事

一 一在形存等事之修等事

廣密等事等事之修等事

在寺中由地等事之修等事

一 寺等事之修等事

一 付上等事等事之修等事

亦不修等事之修等事

中由由等事之修等事

天正三年二月三日

胤則

國分寺 法川院中

二寺西社の方ふ猶なほ殘のこ社のもも散さんして隴圃ろうぼに中ちゆうにありあり當時とうじ佛事ぶつじの巨費きゆうひ想そう  
あり今皇と  
 寺てらより真間まゝまへ行方やう坂さかと云い古ふる此地このち小國こくに分ぶん寺てら能の持もち國くに天てんの堂どう舎しゃありあり所ところ  
二寺各用其國正稅而天下之費十之五と八言ひま  
三若清行の意見封事に上下競傾産造寺捨田施丁極天平國分  
持國坂國分  
平氏ハ頼胤を極屋



成田叅詣記卷一終

江川仙太郎刻

